○無分別なり〳〵
▲思ひ出しけり〳〵
×いつか〳〵といつか〳〵と　麻布飯倉　松ケ枝

×御駕籠脇皆神妙に冷めたがり　三十間堀五丁目　よし野
×南朝を眞ッ暗にしてほとゝぎす　芝口土橋肴店　明石
○神奈川は千石積を傾ける　牛込　やなぎ
花の幕そつとのぞいて吠えられる　青山　岡さき
▲花の山下女石塔があるといふ　麻布　松ケ枝
○弟子の内娘の好くは未熟なり　小石川春日町　澤潟
○灰へかく話は母の氣に入らず　市谷　初瀬
○わつち等が方はかたいと藝子云ひ　麻布　松ケ枝
▲ゆん手には土瓶め手にはつりの錢

命乞愚憎々々をくどく云ひ　芝口　明石
この外幸々評の萬句合には左の如き作がならんで居る。
奥家老幕をしぼつて何やつだ
新造は血氣の勇で腕をほり
たなごゝろ合はせて母をだますなり
羽子板で鳴らして通る竹格子
福引のあとで氣の無い歌がるた
又今度儲けなさいとねぎるなり
繪のかいた腕で値をする初松魚
膝へ出るかびをおふくろ苦勞にし
路考茶をかたみのやうに大事がり
雪中の契と息子題を出し

父母いますす時には息子錢が無し
くわつだつの物だと留守居惚れるなり
海上へこだまをさせて四ッ手駈け
おつかない爪だと下女をおつぱなし
晝顔はいけしやア〳〵と咲いてゐる
御紋まで諸木の兄と敬まはれ
御酒興で奥様或夜緋縮緬
西行は駿河で尻をよごすなり
井戸替に息子なまけて頰かぶり
大くせつたいこすこしも動せざる

「御駕籠脇」の徒士達が「神妙に冷めたが」つて「いつか〳〵と」主人の出を待つて居る、といふ、附句としては最も妙を得たものだ。「南朝」は「眞暗ら」になつてゐる「いつか」「ほとゝきす」が啼くだらうか、「いつか」帝京の北に歸る時があるだらうか、といふこゝろもち、川柳評にもをさ〳〵劣らない。「花の山下女石塔」は飛鳥山の碑を云つたので、成る程「思ひ出しけり」だ。「けつかうなこと」の「花の幕」をのぞいたから狆に「吠えら」れた。「左手に土瓶右手に剩錢」を「思ひ出し」たも可笑しい。其他「新造」の「血氣の勇」や、合掌をことさらに「たなごゝろを合せて」と云つたのや、「父母います」や、「くわだつ物だ」や、「おつかない爪」や、「晝顔」の「いけしやア〳〵」や、「太くせつ」に「たいこ」の「動せざる」や、いづれも柄井川柳の取りさうな句で、本柳樽や、拾遺柳樽に取られたのは少なくなからう、と思はれる。古川柳として見るときは露丸評以上の價値がある、と思ふ。

幸々評は川柳評にも劣らない

以上擧止した萬句合で、當時の前句附選者柄井川柳以外の前句

附選者たる俳人達が、いかなる選眼を以て前句附に臨んでゐたかの一斑はわかるだらう。收月、雲鼓の前者は知らず、幸々の後者を除いて、僅かに露丸に見る可きところあるのみで、多くは月並俳人が、俳句以下の雜俳遊戯に、いたづらに世に媚び、賣名に汲々の無學無智識的宗匠も多かつたらしい。其間に在つて、流石に柄井川柳だけは光つて居たやうだ。この前句附が、とう〳〵川柳といふ名で呼ばれるに至つたのも偶然では無からう。川柳で無い川柳は、元祿享保の類を指しても云へるが、川柳と云ふ選者と同時に生れた前句附選者が、ともかく努力して選眼を光らせた物を、後世に至つては、悉く川柳なる名稱に卷き込んでしまつた、といふことは、何といふ皮肉だらう。

柄井川柳だけ光つて居た

第九章　組連句合の川柳

誹風柳多留へもう來なければならない。時代で云へば、無論柳多留より後である、否相雁行してゐるが萬句合の問題は、一應萬句合で片附けなければならぬ。短かい時間である。讀者の御辛抱が願ひたい。

萬句合は、柄井川柳選の者は勿論、他の選者のも、必ず毎年八月五日の開卷から板行され、一ケ月三回で、十二月十五日を終卷とすることは、前にも云つてあるが、されば、とて、正月から七月までの半年以上を、まるきり前句附から離れては居ない。それには別會兼題

注意すべき組連句合

萬句合とか、角力句合とか、乃至追善句合、奉納句合といふ物がある。誹風柳多留の各篇にも往々それが認められるが、特に注意すべきは組連句合といふのがある。組連といふのは、彼萬句合の發表にある、市谷田町初瀬とか、下谷山下櫻木とかいふ前句附團體は、連と云ひ、或は組といふ、初瀬連ともいへば初瀬組とも稱する。この各團體個々で勝手に句を集め、柄井川柳の選評を乞ひ、結果を摺物として刊行するのだ。私が明治三十六年新興川柳運動に着手した當時、古島一雄翁から貸して貰つた中に、組連句合が有つた。騰寫したのは震火で燒いたが、本物は岡田三面博士の所藏になつて居る。明治六年初瀬連で、桝水といふ人が催主となつて興行した。無論川柳評で、三枚板行だ。その前書に

當秋定會迄何とやらん徒然にまかせ、正月五日より月々五五の會興行し、板行にちりばめ、誠に好道をあらはすのみかと、變な文章で書いてあり、

初瀬連の組連句合

いさみこそすれ〳〵
けつこうな事〳〵
それ〳〵なことと〳〵
かくべつなことと〳〵
よいきげんなり〳〵

の題は連記してあるけれど、●▲の合符は無い。『右川柳評之』と三枚目の卷尾に記してある。例によつて拔萃して左に掲げる。

丑正月五日開(八句の內)

白粉でばつかり持つた嫁をとり　水島

同　十五日開(十句の內)

こたつから出てあたりなは出來ぬやつ　千狐
傾城に思ひ切られてあはれなり　五鳥
色々にからだのかはるばくちうち　歌印

同二十五日開(十句の内)

かみしもの音ばかりきく年始帳　水島
屋形船下りこぎれて夜を明し　鳥印
ところてん氷のにやけた取り廻し　川印
じやうだんに談義などきく花戻り　萬鼬

二月五日開(七句の内)

年始帳供に書かせる氣の毒さ　香印
死なば死にやなどゝこわ〴〵母は云ひ　千狐

同十五日開(五句の内)

行燈にいろはなど書く根津の客　春朝

同二十五日開(七句の内)

人立ちのする年禮の美くしさ　桝水
江戸入りだなどゝ野がげは火をはたき　龜遊
初鰹下女ありたけの聲で呼び　鳥印

三月五日開(六句の内)

糠味噌をきたながらぬは二度目なり　千狐
たゞ入るとばかりで大屋店を追ひ　桝水

同十五日開(六句の内)

その時はごうのはかりの思ひなり　泉河
ことふれを夫の留守に持餘し　斧印

同二十五日開(六句の内)

捕方の來たのがてうど寢入ばな　風子

四月五日開(五句の内)

時鳥より此事と料理人　川印

ごらうじろ歸りませぬと角田川　桝水

同十五日開(五句の内)

路考茶を着てはかけこむ松ヶ岡　千狐

返事ばかしで花嫁は日を暮し　柳印

初鰹ぶつかけにする座頭の坊　蘆川

同二十五日開(四句の内)

檢校の妾に顔を捨てに行き　千狐

たがいふとなしに妾に出たが知れ　柳水

五月五日開(七句の内)

投入のやうにしきみは賣れ殘り　春朝

姑が無ければ下女でやかましい　川印

同十五日開(五句の内)

はだか身へ守を掛けて打つてゐる　泉河

一人ものでも心せく朝歸り　同

同二十五日開(五句の内)

あざのある子の母親の美くしさ　柳印

かねつけるごせをのぞいてこわくなり　千狐

六月五日(四句の内)

先妻の母どうしてか寺で逢ひ　柳印

同十五日開(四句の内)

樽ひろひから御なじみと毒を云ひ　千狐

同二十五日開(四句の内)

圍はれた拳を教へる氣の多さ　門柳

七月五日開(四句の内)

雛を干すそばでていしゆの高いびき　柳水

ふんどしのほころび迄も御針なり　泉河

同十五日開(五句の内)

わるがたい下女君命をはづかしめ　萬鼬

人先きへしたくの出來るやぼむすめ　千狐

かなづちで度々あける一人もの　蘆川

同二十五日開(五句の内)

御家風にそむいて二人見世を出し　柳水

山の客手前の鐘で起こされる　蘆川

奇拔な見方の川柳

多く誹風柳樽に拔かれ、人口に膾炙され、今日にのこつてゐる。「ところてん」を「氷のにやけた」とは奇拔の見方では無いか。花見歸りの氣まぐれに、說教でも聽かうかは當時の人間が、さながら目前で躍つて居るやうな氣がする。「人立ちのする年禮」は、字を見たゞけでも「美くしい」。「たゞ入るとばかり」で店を追ふ大屋、今ならば立退料を出して貰はう、と開き直ることも出來る。昔の社會が見える。「その時はごうのはかり」は仙臺侯が遊女高尾を落籍するのに、女の體を衡にかけてその重さだけの黃金を積んだといふ俗傳がある。それだ。「捕方の來たのがてうど寢入ばな」は丸橋忠彌のやうな場面をちよつと想像させる。「時鳥より此事」は初鰹。「ごらうじろ」は花見から吉原へそれた息子。「路考茶」を着るやうな妻君が「松ケ岡」の緣切寺へかけ込むのは、單に良人が虐待するといふばかりでも

無いらしい。「はだか身へ守をかけて」は破落戸の博徒らしい當時の風俗。「かねつけるごぜ」は成程こわからう。「先妻の母」はその離縁した先妻が死んだのでは無からうか。「樽ひろひからおなじみ」は成上りの大店へ零落した舊友のゆすり。「山の客」は上野東叡山の寺侍か坊主かゞ吉原へ泊つたのだ。催主の桝水をはじめ千狐、柳水など初瀬連の達吟家だつたことが見える。

蓬萊連の組連句合

この組連句合は明和六年であるが、それから十一年ぶりの安永九年に牛込御納戸町の蓬萊連が催した。やはり正月五日から七月二十五日までの組連句合がある。無論選者は柄井川柳だが、前に見えた桝水、泉河、門柳、龜遊等の名が見える。千狐といふのは無いが眠狐がある。同韻だから雅號を改めたのか、或は別人か、市谷田町の初瀬連とは遠くも無いやうだから交渉は有つたらう。この蓬萊連に彼狂歌師として有名な朱樂菅江が居たりしたので、この組連句合の川柳選にかゝる一切の句を單行本として刊行し、『川傍柳』と命名し、菅江これが序文を書いて居る。安永九年に初篇、天明元年に二篇、三篇、同二年に四篇、三年に五篇を出してゐる。菅江の序文は四篇を除くの外には悉く書かれてゐる。或は和文、或は漢文で、大にその博識ぶりを發揮して居る、初篇の序は

朱樂菅江も川柳家

川そひ柳の序文

川ぞひ柳初篇序

十圍にして樹抄絲のごとくなる物は柳、百尺にして枝葉地を拂ふ物も柳、隋代めつた虚空と種れば、陶潛わづうか四五本うゆ。章臺の柳はやたらに折れて叱られる。雪中の柳はをれさうにしてよしにする。多き柳の其中に、平生柳の賞すべきは、夕淺草新堀のほとり、川そひ柳の事なるべし。その柳のこと

の葉や纔に俚語をもてすといへども、敢て一ぱいを述るにたれり、故に自然になびきて世の風俗をさとし、もつぱら靡きて古今の人情に通ず、名は下里巴人の易に居て、實は陽春白雲より難し。嗚呼川傍柳なるかな。

安永九庚子年中門　朱樂菅江序

章臺の柳と雪中の柳の對句はアマリに手柄とも云へないが「叱られる」に對して「よしにする」と聯ねたところは、さすがに川柳式を文章の中に結んだ老手と稱することが出來る。但し三篇の漢文甚だ以てイヤミにして、人をして齒を浮かしむるに足る、と云ひたい。閑話休題安永九年の正月より七月末に至るまでの組連句合を左に掲げる。初篇より拔きて。

子正月五日開(二十句の內)

惣花に生きとしいける物が出る　眠狐
萬歲を嫁お〻せつな〳〵　桝水
大阪といひたい所にきらず桶　盛久
羽子の子をかさぬ子を嫁たゝくまね　一甫
抱いた子を投げさうにしてよしにする　葉十
桐の大木をねかして嫁をせめ　同

同十五日開(三十三句の內)

芭蕉の片腕から大雨がふる　泉河
井戸の中から鼠と猫とを上げ　五樂
二十四五めかけ憎まれ盛りなり　葉十
金魚は一口喰つて吐いて見る　五鳥
あかるい方は出して置く炬燵の手　龜遊

強いたのを下戸内へ來て腹を立て　青峨

同二十五日開(二十九句の内)

愛嬌が高尾しぜんとわるく成り　桝水

ゆうべも公の御噂とどら仲間　一甫

突出しが見立てられると人がちり　閑々

濱屋敷はるかの冲に琴の音　八中

切つて放せばあやまたず堀へ着け　牛瀧

詫言で息子は廣い座敷なり　秋江

二月五日開(三十六句の内)

ぬしにあやかりなんすなと子を愛し　鯉丈

實名はしらず互に懇意也　五鶴

白酒に醉ひ洛外へおん出され　五雲

同十五日開(三十四句の内)

色直しだにだつこせう〳〵　鼠弓

佛まで指ざしをする初鰹　門柳

母の跡追つてはしごを二三段　秋江

呉服店猫のひたひへ竹がはえ　眠狐

ふみが長くて小便がしたくなり　泉河

こんだからかしてやるなと鍋を捨て　三朝

はやり醫者一人殺すと二人ふえ　泉河

同二十五日(三十一句の内)

江戸ならば人死にのある田植也　桝水

能く見える堂八方へ目をくばり　菅江

灸をあつがつて關取笑はれる　一甫

人立の中からしやぼんふいと飛び　鼠弓
金つかふすべも入聟知つて居る　眠狐

三月五日開(三十句の内)

深窓に十有九年やしなはれ　眠狐
古歌を百よんで仕舞ふと疊也　秋江
どつこいといひ〳〵芭蕉二三丁　一甫
二度三度足をはこんでやつともて　閑々

三月十五日開(三十六句の内)

嫁のあら大きく見える眼鏡也　眠狐
金色の文字すはつたを局着る　同

三月廿五日開(三十四句の内)

まゝつ子は一日鼻をたらしてる　梅枝

太鼓持くやみに來たがはじめ也　秋江
よらば斬らんず勢に下戸困り　一甫

四月五日開(三十八句の内)

牛にも馬にも踏まれず女郎買　泉河
手習をしろとぬかすと丁稚云ひ　門柳
大伽藍面白がつて咳をする　眠狐
たつきも知れぬ山中に切れた凧　鼠弓
はらんだる物を井戸堀抱き上げる　秋江
根生わるにしやべらせて嫁御辭宜　水砥

四月十五日開(四十三句の内)

もてたやつ四つ手の外へ度々あまり　菅江
ぜんざい〳〵我れは是大根　鼠弓

らんかんに人をならせるいゝ涼　五鳥

四月二十五日開(三十七句の内)

娘ともいはれかゝさんともいはれ　長笑

口へ袖あてゝ晝寢へ棒を引き　眠狐

我腕を我手で持つてのびをする　一甫

五月五日開(三十四句の内)

いびられに行くが女の盛り也　鼠弓

島中の女が新さん〳〵　五雷

朝歸り婦の長舌を聞いて居る　一甫

瞽女のいろ口跡のよい男なり　門柳

同十五日(三十六句の内)

こいつふると見たら手を附けべからず　泉河

角兵衞獅子伯父らしいのが笛を吹き　門柳

きらずを付けて伽羅の下駄みがいてる　梅斧

嫁の髪今日の内には出來るなり　五英

白粉を掬して下女はつけて居る　一甫

同二十五日(三十七句の内)

かアきイつウばアた成る程杜若　眠狐

駒下駄を川へ落してはやされる　長笑

一日はゆゝしくみえる土用干　一甫

笑はれる顔落ちたかえ〳〵　同

ふがひなさ薄を分けて息子逃げ　桝水

放れ馬さかさに抱いて乳母はにげ　眠狐

六月五日開(八十三句の内)

人にいやるなよと禿に乳をのませ　鼠弓
なんだ玉をつらき小袖をもらひ　一甫
一と笑ひわらつて顔の袖をとり　亀遊
琴を直して嫁を引ッぱつて來る　葉十
三味線をさうでは無いと爪で彈き　秋江
きり〳〵配ばれ地主へは鮭がつく　五連
ねだられて母いが栗を竿でぶち　五扇
三年の内に歯もはげ眉もはえ　眠狐
雨宿り五人で蕎麥を一ッ食ひ　梅枝
金時を峨々たる道で遊ばせる　鼠弓

同十五日開(四十七句の内)

耳へおつ付け損料屋が來やした　五雀

やれそれといふ内に破風を蹴破り　一甫
日本の上り口から聟はづし　船汀
貴様は酔はぬおれが酔うたとだまし　鼠弓
どこの野郎と云へば母きこえます　眠狐

同二十五日開(三十五句の内)

不審紙だらけな四書の拂ひ物　一甫
乳もらひに顔のよごれた男來る　眠狐
鏡とぎの娘だと嵯峨でそしり　鼠弓

七月五日開(四十八句の内)

子のあたまちよつとたゝいてしらん顔　一甫
やす〳〵と三人になる耻かしさ　五扇
下駄をうッちやつて芭蕉は歸る也　一甫

鯨の油で煮た牛蒡下女は食ひ　五扇

七月十五日開(五十一句の内)

子の曰くといつては咳をせき　桝水
大あばた亭主のつらをはりに來る　眠狐
鎌倉の田樂むかし羽根がはえ　鼠弓
不都合な金主を女房こしらへる　五連
下女鼻のぐつとすつこむ程ふとり　秋江
娑婆中が寢しづまつたにうせぬ也　五雲

七月二十五日(六十八句の内)

大名のしづかに通る俄雨　眠狐
駕舁が譽むれば雪もげびる也　青口
花の雨民家へ琴をかつぎ込み　五雀
呉服店紺屋を見る前で叱り　一甫
辨當は出來たに尻を撫でてゐる　一長
泊り客女房ひそ〳〵蚊屋の事　一甫
名代をもう歸らうの番に付け　菅江
どろ〳〵の手をとり孔子よまい事　岸口
ひもじからうと振袖の儘で抱き　萬鼬
よそでよく働らいて居る不精者　桝水
氣をとり直し〳〵嫁孕み　青口
い、涼みあたまの上を歩るかせる　眠狐

安永もすでに九年、所謂全盛時代の爛熟期で、いたづらに技巧を弄し、奇想を貯はへ、律格にも破調多く、後の墮落時代を産むものでこれは後の『誹風柳多留』の條に詳述するが、乍併又川柳は江戸の

江戸の江戸たる所以

物だと主張する論者から云へば、此の如き者卽ち江戸の江戸たる所以では無からうか。江戸は讃歎すべきものであると同時に、また顰蹙しなければならぬところもある。そこが面白いと云へば云へる。

天に杜鵑地に初鰹

前記の句どもについて云へば、吉原で惣花を打つ時、樓中各種の人物が御禮に罷り出るのを「生けとし生けるもの」と笑罵したり、琴を稱して「桐の大木」と云つたり、其角の雨乞を「芭蕉の片腕から大雨」と云つたり、「ゆうべも公の御噂」と反り身になつたり、「濱屋敷」の「はるかの沖に琴」を利かせたり、花見歸りの吉原行、向島から三谷堀へ乘りつけるのを「切つて放せばあやまたず」と猪牙船を矢に比したり、灌佛會の御釋迦が天地を指して居る形を、天に杜鵑、地に初鰹を指してゐるのだ、とふざけたり、呉服店の狹い庭を「猫の額の竹」と文語

一人殺すと二人殖え

めいたり、「一人殺すと二人ふえ」と俗醫者を皮肉つたり、江戸なら田植に人死にがあらうと考へたり、かるたとりの濟んだあとの「疊」を句にしたり、芭蕉が雪見にころぶところまでと詠んだ「どつこいといひ〳〵」雪道を「二三丁」進んだり、とう〳〵「下駄をうつちやつて歸つて來たり、「大伽藍」で「咳」をしたり、徒然艸の「大根勇士」に「善哉々々」と名乘らせたり、朝歸りで女房がやかましく云ふのを「婦の長舌」と茶化したり、「かアきイつウばアた」と業平の歌に感心したり、「なんだ玉をつらなき」と女の小袖ねだりを冷やかしたり、「きり〳〵　配ばれ」と歳暮の送り物に騒いだり、「子のあたまをちよつとたゝいて」見たり、「鯨油で牛蒡」を煮て食ふと下女のしつこいところを痛罵したり、高時天狗舞を「鎌倉の田樂」と變なことを云つたり、佛御前が加賀生れなるところから「鏡どきの娘だと」妓王妓女に惡口させたり、金時の

育つた足柄山を「峨々たる道」と云つて見たり、いづれも江戸兒にあらずんば言ふ能はざると云ふのも誇張した言葉かも知れないが、まアさう云ふことも出來るのである。過を見て仁を知る、短所をゆるして長所を揚げるも好いことだらう、それを的確に諸君に知らしむるは、後章に叙述する誹風柳多留に待たう。

折句の如きも一個の存在

第十章　正徳冠附と寶暦折句

冠附や折句が、文藝を以て見られないことは、誰も知つて居るところで、これまで述べ來つた萬句合に於ても、殆んど問題にはしなかつたが、私は今、江戸時代の川柳を語らうとするのだ。明治、大正、昭和の川柳を語るのでは無い。前句附の十七字を川柳として珍重するに於ては、冠附や折句の十七字をも、亦た川柳として珍重しないまでも、一顧してよからうと思ふ。これも我日本人の物としての、一個の存在である。藝術か非藝術かは別問題として、存在を否定することは出來ない。短章ながら、冠附と折句とで、すこしく

云はせて貰ひたい。正德といふ年號は、寶永、享保の間に介在し、五年で改元に爲つて居るから、正德四年に板行された「ちゑぶくろ」に收められたものは、概ネ元祿、寶永の流を汲んで居るものと見る。冠附が殆ンど前句附と伯仲とまではいかないが兎も角多く載つて居る。私は勝手に、それを冠附の代表として載せ、正德冠附と稱する。

ほう〳〵へ
戀ひらるゝ故身は白齒
つれ〳〵を問ふ樽ひろひ
さかりなり

御目の芙蓉の作り花
鮒の背そむるかきつばた

口惜しや
うなづく時宜にかゞむ禮
ぎうにむかるゝ面の皮
だん〳〵に
乾の卦に乘るいかださし
見て通る

美濃の夕燒木曾つゝじ
いらぬ事

木登り下女が猿利根
古事でつちを叱る儒者
つよい事

山をつんざくほらの貝

まつくろに
歯を實盛にする娘

白い歯は無し鬼女の面
産のひもとく鐵の玉

よいかげん
梢すかせば安房上總

御袖にすがる命乞
座敷八疊つぎ四疊

うつくしや
良人の不義をいはぬ妻

しの字に伽羅の行く烟
折々は

下女が狂歌も御伽にて
牛馬にも成る御抱守

まことをもいふ狐つき
上戸の家も餅をつく

やかましや
咳のこだまの散る溫泉坪

借錢乞に御もつとも
橋の上引くから車

家ぬしへせがむやねのもり
小うた聞き飽く伏見舟

となり芝居の鬼の出場
見事なり

是非とも母の一と器量
あの小をとこに大女房
師匠は婆婆の地藏樣
緣はおかしきいとこどし
辨當ひらく岩清水
清薫の庵松ケ岡
發句のしゆかう雪の鷺
ながゝと
あはれを語る隅田川
無常にひびく鐘の聲
白き絲引く瀧の音
五十三次けふぞ着く

大人にして幼稚な文字遊戯

八ッの景

いくら揭げても、同じ樣なもので、よくも〳〵このやうな幼稚な文字遊戯が大人の癖に出來たものと思ふけれど、ヤハリこれも事實の存在で、元祿時代ばかりで無く、寶曆明和にも無論あつた。當時の萬句合之を證す。文化、文政、天保、弘化の狂句繁昌の時代は無論盛んだつたのだ。今日でも地方へ行けば、かなり行はれてゐる、東北は狂句の王國であり、今日ではだん〳〵に新興川柳の王國にもならう前途を有してゐる昔の出羽、今の山形縣などにも、各村各字、必ずこの連中がある。交通不便の飛驒國などには、昔の面影がのこつてゐると聞いた。日本人といふ人種は、かうしたことの好きの人種か、而してこの冠句なるのは、上五字から連續したもので無く、中七字、下五字の十二字から成り立つたもので。十二字詩と

もいふべきものだ。それは恰かも前句附が、十七字詩で有つて、決して三十一字詩で無いと同じである。

寶曆折句なる小册子

上記の冠附は、正德四年であるが、それより四十一年後の、寶曆四年に板行された『寶曆折句』なる小册子は、私が是まで見た中で、もつとも折句に忠なるものである。折句に忠なりとて、別に江戸文學に特筆する程の物では無いが、前に云つたやうに是れ亦た一個の存在である以上、これに忠なりし者を表はすは無用でない。況してや川柳點萬句合の初めて刊行された寶曆七年より二年早く、將に江戸川柳の全盛期に入らうとしつゝある時だつたに於てをやだ。折句の義は誰も知つて居る。和歌なれば「かきつばた」の折句で、在原業平の

かきつばたきつゝなれにしつましあればはるゝきぬるた。

びをしぞおもふ

俳句なれば「ゆたか」の折句で、榎本其角の

ゆふだちやたをみめぐりのかみならば

などがそれだ。この『寶曆折句』は、百子堂潘山といふ俳人其他十數人の點をしたもので、それには當時の前句附點者として賣れた名は見えない。しかも其句の姿は、多く川柳に類して居る。これこそほんとの川柳にあらざる川柳かも知れない。

百子堂潘山評

(タツミ)田の艸はつかみ合たる水の面
(ツツミ)土を杖强う當るが身の弱り
(タケノ)大工やら下駄のしるしに鋸目
(ハテ)はたちの多い弟子は尼寺

（コ　ウ）子にとりまかれ産んで居る母

折の三字のは、五七五の十七字句で、二字のは七七の十四字句である。

十南堂白羽評

（ケタハ）血脈は絶えて九十の婆ばかり

（シタキ）十萬騎たつた一人で氣が揃ひ

（ムトセ）無心いふ所は筆の勢がぬけ

（ヲハク）尾は池を離れ水卷き雲を卷き

（イヲカ）一日は女ばかりのかし座敷

（ナ　タ）難義に逢ふて大力と知れ

荷旃齊左橘評

（ナスヒ）南無三寶捨てるところへ火の廻り

（セコノ）船頭の心だけ行く登り船

（ナ　ニ）那須の與市がにらむ日輪

杞柳齋秋蕋評

（ヲケフ）大筒の稽古はじめは舟を出し

（タメニ）抱きつけば眼を明けて居る新枕

（ヲ　タ）大酒くらひ大將の相

長谷川園麿評

（アニタ）尼連れた女房威有つて猛からず

（ク　ア）黒羽二重の赤き寺小屋

（モ　チ）もふけためては地獄こはがる

千葉春耕評

（ヒトミ）樋をくゞる時は甲ン立つ水の音

(ツテタ)面ラつきが出來彫物師烟草のむ
(ヘヌス)屁ばかりでぬす人の胴すはりかね
(ウシナ)鶯や釋迦出ぬ先は何と啼く
(ナシ)何が好きとも知れぬ俟人
(ナチ)何にも知らぬ智恵のある人
(テヘハ)前足の屁に獅子舞の腹はもめ

鳧哉樓婆束撰

(ハセヲ)母親をせがんで呼んだ老女房
(ヒカキ)引きさいて嚙ンで捨てゝも氣に懸り
(アマ)姉はひらふてまとろがる艶書
(チウ)馳走のはてをうたふ鷄

柳原社笛撰

(マフテ)まだ咲かぬ振袖の寄る手鞠店
(ソノナ)十露盤に乘る身の上を涙ぐみ
(キイ)近所の耳へ入りし吉日
(タテ)當世で無い爺親の藝

速水瓦跡評

(ニナヲ)人形は泣くも笑ふも同し顔
(ネクコ)ねぢむいた闘羽が髯で碁はくづれ
(フヒ)佛畫はなれて毘沙門をかく

池内貫虹評

(ツトイ)辻角力土俵の内に犬の糞

疊樹隣春三評

(スチワ)進む時智恵と力を分けて見る

不黑庵竹夏評

（タシヨ）大食をして絶食の夜伽する

達磨庵片十評

（ムモタ）むつ言がもれて姑高念佛

（ワヲ）笑へば損の多き箔置き

（ニヱヒ）日本のゑくぼなるべし琵琶の海

（ネタ）侯人は塵大海は君

由器齋畫龍評

（トヒイ）土用干一ツ〳〵にいはれあり

（イアい）ろ〳〵に夜の明ける傾城

輕野蒲登評

（イヲカ）一枚に大蘆原を書きちゞめ

川柳人の他山の石

豐津蒲丈評

（ノヲワ）望まれておどつて見せる若い母

（カカカ）貸座敷から客の來る貸座敷

（キシ）氣に入りやうは知らぬ氣に入り

冠附にくらべるとやゝ物になつて居る、時代の力もあらう、詩型律格がさうさせるのであらう、がいづれにせよ、一場の遊戯文字だ、川柳作る人鑒み可く、他山の石として、今なほこの徹を踏む愚を省みることだ。この外に多くの冠附、折句の書がある、中には見るべきものもあるが、割愛する。

第十一章　萬句合と其時代

萬句合の沿革は、前章までの叙述で、概ネは盡して居るつもりである、が當時に生れたこの前句、卽ち古川柳が、當時の社會の反射鏡で有り、當時の人間生活の映寫であること、他の和歌、漢詩、俳句と異つて居ることは、殊更には說かなかつた、說かずとも、あの句を讀まれた人は、各自の常識を以て考察されることゝ思はれもするが、乍併本書の著者として、これを說かないことは、聊か怠慢の責を免かれないやうにも考へるので、今や萬句合より柳多留に移るに當り少しくこれに言及しようと思ふ、而して寶曆明和の社會との關係は、後章に詳述するとして、こゝには元祿、享保の柄井川柳出でざる以前の川柳について語らう、乍併これまですでに引用した句や、書籍を繰返すことは、著者も其煩に堪へず、讀者も倦怠を催さるゝだらう、幸に材料が後れて手に入つた爲めに、元祿、享保の前句附について、前章に紹介しなかつた物がある、有名な元祿の『寶の市』と一は享保年中の『俳諧忍び笠』及び『ちる袋』である。『寶の市』は卷頭に、元祿の俳人で、西鶴の高弟だつた推本才麿の

寶の市と忍び笠と智惠袋

買　勝やたからの市の國みやげ

といふ俳句のやうなものがあるので、之を才麿點の前句だといふ人もあり、現に酒田の某氏から贈られた古本の表紙にも、後人の筆で墨黑々と「元祿寶の市才麿點」と書いてある、明治以前の筆跡らしい、が、中に「何某何地淸書」或は「何某撰何々寺淸書」といふやうな前書

で、句が並んで居る、さうして所々に批評めいた詞書がある、思ふに元祿時代の京阪の前句附選を集め、これを編輯したのが才麿で、或は更に選の又選などをしたのかも知れない、清書といふのは選拔した句を新に筆寫するといふ意味だらう、「文流秋吉清書」とある中に、「近かうも見えず遠くも見えず」に附けて、

盥から盥へ歸る五十年　秋吉　柳枝

盥から盥へかへる

とある、たしかに後の寶曆明和でも見たやうに思ふ、現代の人も詠みさうな句だ、それが元祿にすでにかうして出て居る、ところが、この本の著書(才麿だらう)がこの句へ

ハメ句なり笠句を直したるなり

と書入れて居る、するとこの柳枝といふ句主以前に誰か笠句冠附として作つたと見える、產湯の盥、湯灌の盥、生れる時の盥から死ぬる時の盥までの一生だといふ、安價ながらも人生哲學の第一歩を詩化したもの、それが三百年も前の人が遊戯の間に作り出して居るとなると、所謂寶曆明和の古川柳の名句にも、聊か首が捻りたくなる、ハメ句といふのは古句や、或は他人の句を自分の句として、其題に合ふやうにして出すことをいふ、この文流清書には、このハメ句が多かつたと見え、才麿だらうと思はれる人の評言に

此清書句七十の内、半分過ハメ句なり、さても〳〵メクラ猫なる點者哉と見る、人毎に手を打ちて笑ひけり、予が曰く、此點者、世間にアマリもてはやさぬ人にて、清書稀〳〵なれば、卷數見玉はぬ故に、ハメ句といふこと御存知なくて成るべし、つれの點者衆も、是を能く御覽なさる可し、ハメ句せぬ人のハメ句をニクムは是なり、句半分過ハメ句へトラレ申す故に、外の句

メクラ猫なる點者かな

皆すたり申すなり、されども又鎗句屋衆は加樣の點者がなければ、やせがなをらぬと云ふて笑ふよし也、いづれの點者衆もヂブンにはヨク參とも、是程物喰イのよきは天カ下には亦とは在るまし一笑々々。

鎗句屋の鎗の字は不明だが、懸賞かせぎを專らにする遊戯と射利とを兼備した俗臭詩人が二百五十年の昔にも居たのだらう、さうして半は盗句を推選して得々顔の贋撰者、賽宗匠も居たのだらう、元祿の昔も、昭和の今も、世にぬす人の種は盡きまじだ、八虹撰の道明寺清書といふに「月の内には五度も三度も」に附けて

世にぬす人の種はつきない

米ふみに向い灘から逢ひに來る　上野　一泊

酒屋の米つきが、河内の向フ國、和泉の堺、酒造では灘で有名な土地から逢ひに來る、今日なら汽車もあれば、電車もある、昔々は大變だつたらう、千里を一里といふやうな氣持で、戀の遠路往復、今ならば二三時間にも足らぬ所をだ。「來山門人小西樂山」とあつて點ともとも無いけれど、其人の清書だらう。「其かはり也〳〵」の附句

吉野から秋は立田へ喰ひに行く　岸和田　重正

松風は烏帽子狩衣抱いて寢る　高田　梅雪

前者は花見のかはりに、秋は紅葉狩、但し花より團子、紅葉には酒だとさういふ俗人を諷した句、後者は謠曲の松風、在原行平の情人、烏帽子狩衣は行平の着衣、女の情を歌つた句、兩句とも元祿の都人の遊樂、花見、紅葉狩、謠曲等で時代色を出して居る。

「其ゆかりなり〳〵」の前句。

かけたるは素槍一本山刀　伊丹　市林

深山に籠り住み、浮世の風塵を離れ、山の獵男とも見る可き人間が

楹に懸けた素槍、山刀、世にあるときは何の何某といふ名ある武士だつたらう、といふやうな草双紙に出るやうなことが、實際には有つたのか。「よいもわるいも〳〵」の前句

太夫とて位を買つた分の事　御所芦弓

松の位の太夫職、遊女の横綱を敵娼にして見たところが、よいもわるいもないもてなしより、其楊代の高いのは、その松の位や、太夫といふ職を買ふからだ、といふのだ、ところで茲に讀者の注意を願ひたいのは、この樂山點には殊に、他の前句附風で無く、まつたくの俳句がある、いや俳句ぶりの修辭で作られたのがある。「あちらに毛ありこちらに毛あり」といふ題に

青草にかけ出す牛の手綱かな　河州一蛙

といふ類で、但しそれは少れで、其他の俳句ぶり修辭の句は、いづれ頭に『句』と印がついて居る。

兼平が最期に似たる雲雀かな　紀山ノ内勝山

夕顔や莚一枚持つて出る　櫻井鶴玄

切て食ふ家の手柄や具足餅　小湊其見

ひよいと飛びそこで皆飛ぶ蛙かな　上野伴志

などが、其例である、もつとも

白鷺よ汝は雪によごれたか　信州○組

といふのもあるところを見ると、發句で人事の關係を主にしたり滑稽なのは、この清書へ收めたのかも知れない、それから一禮といふ人の磯野村、笠村、御所等に於ける清書を見ると、「うそ曇る日は草に蒸るゝ」の前句に

世の中の松陰は皆オレの家　法隆寺激水

かういふ風の放浪者氣分は今日に至つても、其人に乏しくない、

「あんまりこれは胴慾なこと」の前句

建て出す隣の藏は富士の蓋（フタ）　寺戸牛丸

私が震火後、高圓寺に移つて、始めて住んだ家は、二階からきれいな富士山が見えて居たがその前へより高き二階を建てたので見えなくなつた。「錢次第なり〳〵」の前句

庖刀の間へ伊勢海老

伊勢海老が庖刀の間へ這つて來る　マン如白

ブルジョア階級には、昔もこんな生活が有つた。「つれ〳〵と顔を詠める」の前句

編笠にとんぼのとまる占屋算　目安花木

今は、こんな賣ト者は、くすりにしたくも居ない。「雪は降つても又消ゆる物」の前句

湯上りの素顏がほんの女なり　曾井火輪

「ひとり〳〵にあてがふて置く」の前句に

日本に男ばかりの島も無し　平野南木

今の所謂其通り川柳なるもので、詩の單純化が邪道にはいるとこんなのになる、昔は前句などはこんなので澤山と思つたのかも知れない、ヤハリ元祿は川柳の世界ではない。

『俳諧忍び笠』は享保十五年の三月に出版されたもので、前句、發句と大書してある、俳句と川柳との雜居だ、「ゆるりと〳〵」の前句に

輪をはづす時計

輪をはづす時計は御客樣の爲め

小人島の火の見櫓見たやうな置時計で輪をはづすと振子がとまつて、時計が進まなくなる、客の歸りをとめて、いつまで馳走する親

切、其時代に時計のある家は、大名で無ければ大町人の家位なものだつた。

川越の背中に美女の肌ふれて

昔の大井川其外橋の無い道中の川は、みんなこの川越の肩を借りて渡つたものだつた、ほりものなどのあるきたない川越の背と、美くしい女の雪の肌、昔の若き男をなやませたものだらう。「三十五六四十七八」といふ奇拔な題に附けて

花の幕一重あなたは御所局

御殿女中を御所局と云つたのは、ちつと無理にきこえるが、其時代にはさう云つたかも知れない。「長局」と同じ意味だらう。

うき世繪の男福引長局

などいふ變なのがある、三十五六四十七八の女が大名の大奥には多かつたのか。「おもふ儘なり〳〵」に

聟柳姑柳　嫁柳

といふ氣拔なのもある、平和の家庭、模範の家庭か。「はやいことかな〳〵」に

筆戰に間無く射掛ける句の矢數

は、昔だつて佳句とも思はれなかつたらうが、其頃にもかういふ達吟家が居たといふことだけはわかる。「おもひ〳〵に〳〵」の前句

下戸組は碁盤持たせて櫻狩

碁盤を從者に擔はせて花見に出るなど到底元祿享保のものだ、大正昭和のものでは無い。「上の分別〳〵」の前句

吉原の喧嘩を入れる刀箱

吉原ばかりでは無い、昔の遊廓では武士の腰の物(大小刀)を預かつ

花見に碁盤の贅澤

た者だ、女郎に對して斬るの突くのと騒がれては困るからだ、卽ち刀箱へ預かつた刀をしまつて置けば、喧嘩は出來ないからだ、上の分別だといふこと、これも今日の社會には見られ無い圖。

なほこの外に發句及び、川柳筋の前句附と聊かちがつて居る、たとへば「愛相も無く、座を立つて行く」といふに附けて

諫言の言葉の花よ死後に咲け

「月ゆりこぼす草の白露」といふに附けて

鼻息の木魂聞き出す嵯峨の感

武藏野は尾花の渦に富士を卷く

萬物に無常の風の塀もがな

といふ類の前句も有り、また「發句の部」と特にことわつて

吸物のスマシ澄みけり後の月

夕立は暑さをはらふ劍かな

作り髭臍までとゞく暑さかな

等の句も有つたりするが、これは川柳に直接の關係が無いから略して置く。

蝶々子評の鎖國敵愾

『ちゑ袋』は享保の前の正德に出來た本で、其時代でかなり名を賣つた蝶々子其他の判を經た前句がのつて居る。「をさへたりけり〳〵」に

白鳥の德利ころぶを鷲づかみ

醉人の本性、句にやゝ力が見える。

對馬から鴆惡姦とはねさせず

朝鮮語も、支那語も、對馬からこつちでは押さへて通用させぬぞと、鎖國人の敵愾心、まさに當時の日本人氣質、江戸兒氣質。「毎日の事

〳〵」で

高輪の月積んで出る車牛

朝から仕事に出る車町の車牛、空には月が在る、宛然江戸名所圖繪

「のぞみ次第に〳〵」で

鶯の鳴いた木も有り薪問屋

梅の枯木を薪木に交せる、今日になつてはつまらない句だが、その當時は膝をたゝかせたらう。

猿猴の手で盜みたしかきつばた

佛說から出たお伽噺の通俗化といふだけ、「いつのまにやら〳〵」で

桃の媚腰の柳のちるあらし

いやな句だが、後世の物より、まだしも上品にかくしてある、「つれだちにけり〳〵」で

相傘の片袖づゝは冲の石

「冲の石」は申すまでもなく。「人こそ知らぬ」濡れて「かはく間もない」といふこと。

かう云つた風に道草を食へば、際限が無い、いざ柳多留の本文に急がう。

第十二章　誹風柳多留初篇

江戸の川柳は、誹風柳多留に十々滅を刺す、柳多留初篇より七八篇迄讀めば、寶暦明和の川柳はわかる、八九篇より二十二三篇迄讀めば安永天明の川柳はわかる、それより後の狂句時代、所謂川柳墮落時代も、その後年々、或は隔年に出版された柳多留を見ればわかる、柳多留の出版に依て、はじめて江戸時代の川柳が、なにかなしに世人から認められたのである、柄井川柳が選評した萬句合から、吳陵軒可有が拔萃して、單行本として出版したのが最初である。

柄井川柳と吳陵軒可有

柄井川柳、通稱は八右衞門、名は正通、享保三年、淺草門前町（今の榮久町）に生れ、龍寶寺の寺侍、新掘端の名主である、寛政二年九月、七十三で死んだ人。　吳陵軒可有、其姓名を詳かにしない、又の號は木綿、天明八年に死んだが、生年がわからないから、享年もわからない、江戸時代の川柳に取つては、二人とも、大なる勳爵士である。

柳多留初篇の序文

明和二年誹風柳多留發行の序文に

さみだれのつれ〴〵に、あそこの隅、こゝの棚より、ふるとしの前句附のすりものをさかし出し、机のうへに詠る折ふし、書肆何某來りて此儘に反古になさんも本意なしといへるにまかせ、一句にて句意のわかり易きを擧て一帖となしぬ、なかんづく、當世誹風の餘情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽

と題す、于時明和二酉仲夏、淺下の麓、吳陵軒可有述

寶暦七年から明和元年までの前句附萬句合の反古を出して見

て、この中から「一句にて句意のわかりやすい」即ち一句立に獨立してゐる者を拔萃して本にして賣り出したら、賣れるかも知れないと考へたのが吳陵軒で、オモに川柳評の萬句合から取つたのだが中には他の人の評點したのも取つたらしい、さうして單行本にして賣り出した名を柳樽としたのは、婚禮に使ふ樽、目錄に緣起をかついで「家内喜多留」と書く、あれだ、川柳の柳に因んだことは申すまでも無い。「いもせ川」は婚禮の冠言葉、「誹風」は俳風だらうが、俳と誹の區別がわからぬほどの吳陵軒でもあるまいが、誹の字音「ひ」は俳の字音「はい」にも通ずるし、いくらか「俳」のおかしみに、誹のそしりを含有させて、ことさらにこの字を書いたものだらう、といふのが、一ばん穩當な見方だと思ふ、序文一枚の外、本文小半紙形四十二枚、(今ならば八十四ページ)半枚(一ページ)九句、總計七百五十六句を收めてある、今殘つて居る本でいちばん多いのが、卷頭第一ページ(半枚)に

初篇柳多留に數種の本

五番目は同し作でも江戸生れ
かみなりをまねて腹掛やつとさせ
上るたびいつかどしめて來る女房
古郷へ廻る六部は氣のよわり
ひよ〳〵の内は亭主にねだりよい
伴頭は内の羽白をしめたがり
鍋いかけすてつぺんからたばこにし
人をみなめくらにごせの行水し
米つきに所をきけば汗をふき

とあるのである。其次に時々見かけるのが

三神はなぶるとよみし御すがた
頂いて受けべき菓子を手妻にし
緋の衣着れば浮世が惜しくなり
太神樂ばかりを入れて門を締め
附木突腰におどけた拍子あり
馬かたが居ぬと子供が藝をさせ
水がねでむねのくもりをといで置
袴着にや鼻の下までさつぱりし
習ふよりすてる姿に骨を折り

となつて居るのだ、まれに見つけるのは(私は一度見たことがある)

下駄さげて通る大屋の枕元
その手代その下女書は物言はず

竈締の内はめし焚かしこまり
藪入の出がけにものをかくされる
死に切つてうれしそうなる顔二つ
土こねは手水を遣ひ幣を立て
三圍のあたりから最うぶちのめし
大いそは駈落するにわるい所
田樂を面白く食ふ座頭の坊

この三通りの本をよく見ると、別に編輯の順序が替へてあるので無く、板行にした紙を置きかへて綴ぢたゞけである、だから同じく「五番目」をはじめにした本でも、「三神」をズッと後へ綴ぢこんだのもあれば、近くへ綴ぢたのもある、それ〳〵だ、なぜに同じ物を、いろいろに綴ぢかへたかといふと、この柳多留が、案外に賣れ行きのよい

寛政改革と柳樽の改版

ところから、三版にも四版にもして賣り出したそのたびに改めたのだ、また所謂後の松平樂翁老中筆頭の時、所謂寛政改革で、風紀振粛をした結果、不穩の句を削り、他の句をはめ木にして改版した時改めたのだらう、これは岡田三面博士の『寛政改革と柳樽の改版』といふ新著が詳細に考證して居る、愚案に「下駄さげて」を卷頭に置いたのは、いちばん當時の自然生活に密接して居るから、店頭で見せられた時、もつとも購買慾を煽つた事と思ふ。「下駄さげて」が當時の社會で、裏店の借家生活を云ひ、「その手代」で、奉公人同士の戀「竈締」はどこにも見かける庖厨の寫生、「土こね」は建築、「三圍」は梅若の故事、「大いそ」が聊か詠史で緣遠だが、「田樂」はこれも其時代の社會生活に常に目に觸れる者だつたらう、以上は其卷頭の問題だが、流石にこの初篇には名句が多い。

死に切つて嬉しさうなる顔二つ

すつぽんに拜がまれた夜のあたゝかさ
鶏の何かいひたい足づかひ
ふがいない魂二つ番がつき
緋の法衣着れば浮世が惜しくなり
落ちて行く二人が二人帶が無し
四五人の親とは見えぬ舞の袖
死に切つて嬉しさうなる顔二ツ
丸藥をもらふ座頭はちゞこまり
金の番とろ〳〵としてうなされる
大門をそつとのぞいて婆婆を見る
日がらかささして良人の内へ行き
「すつぽん」の拜むやうな手つき、それをかまはず首を切て料理をし

て、食ふてねてあたゝまる人間の生存慾。「落ちて行く二人」は不義密通。「ふがいない魂」は狂熱な戀の心中未遂。「死に切つて」は遺憾なく心中を遂げた。「鷄」の足づかひは何を象徴するか。「日がらかさ」は大家に乳母奉公した妻が、或日主人の乳兒を奉じ、堂々と訪問して來た、其良人の氣持、「丸藥」は巧まざる滑稽。「緋のころも」は大僧正のさびしい悔恨。「金の番」また强盜に脅される夢を見た。「大門」を出られぬ吉原の女郎のこゝろもち、いづれも人の心に喰ひこむ、ところが寶暦明和の當時でも、また其後の江戸時代でも、一般に歡迎されたのは、このやうな比較的深味のある句で無く、次の數句のやうな、ちよつと垢拔のした可笑味、穿ち味、輕味のある句だつたらしい。

可笑味、穿ち味、輕味

出てうせう汝元來蜜柑箱

鍋いかけすてつぺんから煙草にし
若後家のふせう〳〵に子に迷ひ
駿河町疊の上の人通り
猿田彦いつぱし神の氣で歩るき
碁敵はにくさもにくしなつかしさ
入レ髪でいけしやア〳〵と仲の町

「出てうせう」は捨子を拾はれて育て上げられた奉公人が、つねに主人から叱られる言葉、「鍋いかけ」はスグに仕事にとりかゝることが出來ない、火をおこし、金をとかす間、ゆつくりと煙草を吸ふ、「若後家」は皮肉、「駿河町」は今の三越、昔の三井の呉服店の繁昌、「猿田彦」は祭禮行列の先ばらひ、「入レ髪」は老人の女郎買ひ、いづれも今日に至るまで人口に膾炙する、それからこの初めて出された柳多

かな佛は拜んだあとをたゝかれる

留に、神佛の句が、非常に多いのは、都會人に迷信の多い、特に江戸人に甚だしかつた、といふ證據にならう。

たいこ持宗旨ばかりはまけて居ず
銅佛は拜んだあとをたゝかれる
新發智のよると輪袈裟で首ッ引き
江戸を出て姿の出來る拔參り
寒念佛ころぶを見るは女なり
祭から戻ると連れた子をくばり
談義僧すはると顏を十ウしかめ
雨やどり額の文字をよく覺え
九郎助へ代句だらけの繪馬を上げ
護國寺を素通りにする風車
梅若の地代は宵に定まらず
寒念佛みりり〳〵と歩るくなり
別當は馬や狐で茶を湧かし

「談義僧」の顏をしかめるは御十念、「九郎助」稻荷は吉原へ近い、「護國寺」へは參詣もせず、急ぐ雜子谷の鬼子母神へ、「梅若」念佛には雨が多い、「馬や狐」は繪馬、此神佛の句に就ては後に云はう、またこの初めて出た柳多留には、發句(俳句)に近い句が多い。

鹽引の切り殘されて長閑なり
赤とんぼ空を流るゝ龍田川
白魚の子に迷ふころ隅田川
狩人の子はそれ〴〵に雀罠
隣へもはしごの禮にあやめ葺

箱王が雨のたもとに蟬の聲
粉のふいた子を抱いて出る夕涼
犬蓼のこゝろよく這ふ無常門

元來この柳多留は一種の俳書として發兌されたのだから、無理も無い、といへばいへる、現に左の數句の如き、前句附といふよりも、俳諧の歌仙運座で附けられた句に見えるではないか。

俳諧歌仙運座の句

庵の戸へたづねましたと書いて置く
人の物たゞやるにさへ上手下手
笑ふにも座頭の女房向キを見て
美くしい上にも慾をたしなみて

ともかく、この柳多留は、江戸人の嗜好に投じて賣れ行きがよかつたので、翌年には、スグに柳多留二篇が發行された。

古川柳の碧巖錄

この柳多留は、それから年々發兌されたが、前記前篇に名句の多かつたことは申すまでも無いが、二篇、三篇で其盛を極めて居る、この二篇、三篇の比較は、見る人の好み、讀む人の氣持でちがふ、私なども明治三十六年ごろ、卽ち新川柳興隆の當時は、柳多留參篇を以て、殆ンど古川柳の碧巖錄とまで云つて推奬した、それが二十五年經つた今日になると、寧ろ貳篇の方へ團扇が上げたくなる、其理由は澤山あるが、本書は川柳論が主で無いから、しばらくこゝに貳篇、參篇の爲めに一章を立て、讀者の判斷に任かすことにする。

第十三章　柳多留二篇三篇

二篇は高尚優雅、三篇は豪宕不羈

柳多留貳篇には貳篇の特色が有り、參篇には參篇の特色が有る、貳篇の特色は高尚優雅で、參篇の特色は豪宕不羈だ、貳篇は俳句よりも、寧ろ和歌に近い、と云つて三十一字でも無く、十七字であるが、その前句附が俳諧を透したもので無く、いきなり連歌から來て居るやうに見える。

雪打の加勢に乳母の片手わざ

といふ句が、その卷頭にある、江戸の市井を舞臺にしてあるが、その床でうなるチヨボは、まつたく上代の繪卷物の詞書だ。正月の家庭遊びを

かるた會我敷島の道ならで

必ずしも文學的に和歌をもてあそぶのでは無い、といふ。田園生活をも

すげ笠の內へ帶とく眞菰刈
草の庵蠅とりもちにきりぐす
狐火のおり〳〵野路をほころばし

野道だの、繩手だのといはず「野路」と云つたのも和歌だ。季節の句にも

伊勢よりは三河の顏は長閑なり
御臨終二月に虫の聲を聽き
草もちの使はすぐにいとまごひ

はごの子の干物を拾ふあやめふき

とある、春の萬歳を「三河の顔」といひ、五月の家根にあやめを葺く時、軒筧に、正月遊びにつき上げたまゝ無くした古羽子を拾ひ出したといふのを「はごの子の干物」と云つたのは所謂川柳式たが、詞は上代式だ。　賤業婦の巣窟と、今ならいちがいにいやしむ、昔だつてさげすんで居た遊廓を詠んだものにも

立ひざでふみを書くのも姿なり

うらの夜は四五寸近く來てすはり

かむろから目にもろ〳〵の罪を見て

ほゝづきはかむろへはさむ水ざかな

優にやさしく詠んである。　戀の葛藤をも

きれぶみにせめて使ひのむなづくし

「むなづくし」は胸ぐらをとる事。　身投げをも

橋の番たしかに投げた水の音

これがホントの川柳だ

橋番をとくに「橋の番」としたのでも、この頃の一部の前句附應募者、今日でいへば川柳家の作句態度がわかる、これ等の句を、私が新川柳興隆を企てた明治三十六年以前に、多くの人に示して、「これがホントの川柳だ」と若し云つたとしたら、きつと「何だ、こんな歌のきれはしで、俳諧のやうなものを」といはれたにちがひない、川柳はよく人情を穿つてゐる、といふことは局外の人がよくいふ、穿つといふことは、解剖、描寫、諷罵、同情、いろ〳〵に聞こえるが、たゞそれだけのものでは無い、元來我國文學は、東洋文學の影響を多く受けてゐるから、專門的に、高踏的に、スグに餘韻餘情と哲學的といふよりも宗教的に傾き易く、人の個性につき、心理學的に縱横に解剖し、人の

感情につき、官能的に深刻に突ッ込むといふことは長所で無いのだが、この川柳には時々、これにぶッつかる、たとへばこの貳篇に收まつた句の中に

小判にてのめば居酒も物凄し
縫紋をさぐらせて見るごぜの母
かんざしも逆か手に持てば恐ろしい
本ぶくのもとの如くに吝わくなり
尼になる場を氣で食つて嫁になり
一人者小腹が立つと食はずに居
迷ひ子の親はしやがれて禮を云ひ
町内でみんな忌服のある娘
ごぜの尻たゝけば無理な目をひらき

一唱三嘆の名句

きちがひの膝をそばからかけてやり
くらやみで龍王湯をかぶりのみ
峰の寺小僧があればこそ笑ひ
土けむり中にまじ〳〵座頭の坊
うつゝにも團扇の動く蠅ぎらひ
ごぜの金口惜しそうに見て貰ひ
渡り初めおつかなそうに踏みよごし
むごらしくもゝだちを取る赤蛙
やせぎすは乳母が自慢の亭主なり

こんなのは實に一唱三嘆に値するが、但しそんな句ばかりでは無い、當時の大衆から、大に歡迎されたらう、と思はれる、淺薄な、併しちよつと面白い、といふ句はある。

女房はなんぞの時を待つて居る
一文のことでふり向く黒木賣
珠數屋ではこしらへ上げてひと拜み
約束の戸は二ッとはたゝかれず
火の見番ひとの拾ふを見たばかり
牛かたのあきらめて行くにわか雨
おらくじやといへばあたまを撫で廻し
いたゞいて仕着せの不足舌を出し
かんきんの間うれしい顔二ッ
醫者衆は辭世をほめて立たれたり
逢ふた日を譽えへ居るが女の氣

たいがいの古川柳崇拜者は、この邊の句で兜を脱いでしまふ。「實

に面白い」「こゝだ」と膝をたゝくのである特に自然描寫の句で

ぬひはく屋五色に壁へ吹きつける
着かざつて乳母は裸を追ひ廻し
鳥の毛を捨てるに風を見すまして
御物見に餘つた首を塀へ出し
盃をさせば三味線杖につき
泣く時の櫛は炬燵を越して落ち
筏のり馬鹿々々しくも野を戻り
かみなりも雀が啼けばしまひなり
柱にもすこし葉のある村芝居
石屋にも一ッか二ッ繪具皿
床見世の將棊は一人腰をかけ

二三人見物のある瞽女の炙
いき物のやうにとらへるところてん
車ひき梶がはねるとぶらさがり

今人の及ばぬ寫生吟

新川柳興立以來にも寫生吟を得意にした人も有つたが、到底これにはかなはない、柳多留貳篇の言草は先づこれ位として。

いよ〳〵柳多留三篇の紹介になる、私が新川柳興隆を目的として立つた當時、この柳多留三篇で、先づよろこばせられたのは

はり物の大蛇に見えるつむじ風
やかた船山のはい出る如くなり
五百兩いぢかりまたで歩るかせる
はたし狀泣くな〳〵と墨をすり
てんびんをたゝく手代の目がすはり
大釜へ半分はいる鍋いかけ
にげしなに覺えてゐろは負けた奴

等の強い調子の、それで大きな氣分のする句に當面した時だつた江戸前を自慢にする市井の尋常茶飯事をすら

すり鉢に舞をまはせるいくぢなし
三度まで産婦へ聞いてじれさせる
御親父へそのめりやすがきかせたい
女房へ乳だ〳〵と押ッつける
男湯を女の覗ぞく急な用
男の子はだかにするとつかまらず
夜談義を半坐で母はつれて逃げ

この男の子が裸になつて、着物をきるのはいやだ〳〵と逃げ歩る

社會下層の私生活を句にする

くのが、すでに初篇の「かみなりを眞似て」や、二篇の「着かざつて乳母は」のやうに、いつも題になるのを見ても、この川柳なるものが、これまで多くの文學に取り扱かはれなかつた、下層社會の私生活を、いかなる瑣事でもとりいれたことは、當時の大衆によろこばれた所以であらう、これどころでは無い、もつと下等な、へたに詠んだら正視の出來ない事柄、屁だの糞だのといふやうな言葉を平氣で詩化して居る。

よる夜なか孫を泣かして叱られる
紙二帖寢まきのつまへ持ち添へて
煙管にてよせる屏風のもどかしさ
柳原幕が遲いと石を投げ
野雪隱地藏しばらく刀番

屁をひつておかしくもないひとり者

尙ほ、この三篇にのつて居る句が、私共を魅惑した、と云ふと妙な言ひ方だが、これに感服させられたのには理由がある、修辭に當つて、その語勢を強める可く、一種の助動詞、或は間投詞と云つたやうなものが用ゐられて居る、ことさらに誇張した、わざと脅かしたやうな言葉がつかつてある、是れ亦た技巧と云へば云へやう、左に圈點を附して、其證を示す。

御内儀の手をおんのげる鰯うり
火吹竹持つてまき屋をしつ叱り
岡場所のありんすなどはづ横柄
一分だけやり手は尻をどたつかせ
かんざしでつツ突き廻す三世相

助動詞、間投詞の技巧

吸いつけてあつたら内儀ふいて出し
ぶちまけて二タ足にげる炭俵
料理人いつそ池だとつま立てる
晩あたりちつと來たまへみんな下手
乳母が宿齒をむき出して一分とり
尺八で五ッたゝいておつぱなし
乳母が親熊手のやうな手であやし
大三十日こゝを仕切つてかう攻めて
れい〳〵と追手の中に聟の顔
ふんごんで煤をとるのが旦那なり
其くせにろくなものをば連れて來ず

「お内儀」にむやみになまざかなをいぢられてはたまらない、「火吹竹」で叱るは下女、薪屋がいぶる薪を持つて來たから、「ありんす」は吉原の太夫がつかふ言葉、「場末のすべた女郎のつかふ言葉では無い、「吸いつけて」あの美くしい内儀の出した煙管に口づけするつもりだのに、拭いて出した、惜しいことだ、「料理人」はだいどころで何か水を覆へした下女をとがめる、「れい〳〵」は婚禮の晩に他の男と駈落をした花嫁の行衛をたづねて、と云つたやうな小事件を、言葉の上で、強め、高めてゐるのだ、是れ蓋し所謂江ッ戸兒の江戸ッ兒たるところで、かうした風の川柳は江戸人で無ければ、ちよつと作れない。また古川柳の一特色と見なしてよからう、この柳多留參篇が、私の新川柳興隆にどれだけの關係が有つたかを、ちよつとこゝで云ひたい、それは私の機關の「川柳人」誌上で、昨年末より今年にかけ、更に明年(昭和三年)に亘り連載する『古川柳の新研究』と題する論文

柳多留三篇の影響を受けた川柳

の一章である、今の句を江戸時代の川柳紹介の本に掲載するは筋ちがひのやうで、さうで無い、寶暦明和の川柳の力がいかに新川柳詩人に大なるものを與へて居るかを證するのは、卽ち古川柳の力寶暦明和の力、委しくいへば柳多留三篇の力を示すものだからである、

明治三十九年から、四十、四十一年にかけて私の當時の機關だつた『川柳』といふ雜誌で、この柳多留三篇の所謂雄渾、壯重、宏大、瑰奇な句が、專ら宣傳された結果は、果して一ッの傾向を新川柳界に直接間接に與へたのである、すくなくとも我柳樽寺(劍花坊が川柳運動の團體名)の句風なる者をかたち作つたのである、乍併第一に其影響を蒙つた私ですら、夢にも柳多留三篇を手本にして作句しやうだの、ことさらにさういふ調子に作らうのといふ氣持は無かつたのだから、況んや他の川柳家、それがたとへ柳樽寺に來て作句をはじめた人であるにしても、決してさういふ意志があらうわけは無いが、所謂これまで一般にさう信じられた川柳江戸前論から脫出し、新らしい天地といふまでに至らずとも、新しい句風を創造しようといふ考への人、胸間卓落の氣を吐かうとした人達が自づからさう爲つたのだらう、なにかなしにさういふ雰圍氣が作られたのだらう、試みに其句風の一班を擧げて見よう、先づ私の句で(明治三十六年より大正三年ごろ迄の)

三篇の影響を受けた劍花坊の句

久米仙が招けど雲は下りて來ず
師を賣たす面ラが揃つてクリスマス
さア俺も死にゝ行かうと鎧を着
身動きの出來ないなりが大時代

三井寺の餘韻湖水へうなりこみ
鶴龜は夫れ青陽のうたひもの
惠林寺の和尚凉しう火にはいり
天之を憎んで長者二代無し
厄介なものを不動は背負つて居る
繩付へ女の惚れる國事犯
薩摩琵琶扇のやうな撥を持ち
圖武六の唐人其名李太白
いつぱいに富士をひろげる淺黄空
小千年書くことも無い日本書記
紺青の海へ胡粉の帆かけ船
蔬菜館天下の薯をあつめたり

御料林天狗のとまる木がならび
王の字の徽章閻魔のシャツポ也
美髯公ひとの二階に四十年
命から離れて木乃伊四千年
廟堂の高きに在りて兜町
羅馬法王を甜めに行く一萬里
萬卷を胸に疊んで居候
空閨を守る男の大あばた
手力雄かたい雨戸をあける氣味
千束にわれは年ふる野干なり
姉藝者苦界十年古狸
うづ高き沒書の中に八右衞門

柳多留三篇と劍花坊

今日になつて見れば、自分ながら面目無い幼稚なものもあるが、作つた當時は、すこしも氣づかず好い氣持になつて、自分の主觀を表現するに其當を得たもの、我より古を爲すもの、劍花坊より之を創めた調子だと自分も信じ、他の人からも劍花坊調なぞといはれて居たが、實は知らず覺えずの間に、この柳多留三篇を讃美し、愛唱して、其影響を蒙むつたのだつた、ひとり私ばかりでは無い、當時の柳樽寺同人たりし人、其他この流れを汲んだ人には、ヤハリ直接に三篇を讀んで、それにかぶれるか、或は私の句調に共鳴されたかゞ看取される、無論藍より出でゝ藍より靑しで、私の句以上の佳句、見方によれば柳多留三篇以上の傑作を得られた人も有る。

花川戸今は鼻緒に馬肉鍋　花醉

村一揆桶に二石の酒盡きて　林鐘子

やかましい晩鐘を聽く駿河臺　劍珍坊

東禪寺和尙を生きた鐘と聽き　飴ン坊

大日本天草産の醜業婦　花醉

大釜に雪を欺むく米の飯　艶殺坊

二三人ばらして其夜土地を賣り　錦丸

いう〳〵と大きくまがる筏乘り　角戀坊

借り倒すいつちしまひに拳銃屋　久米一

大入道八疊敷とひとつもの　花醉

橿原に常世不斷の風の音　雉子郎

歸らんか田園荒れて主義は賣り　小寒郎

こみ入つた風呂敷を着る大和尙　蠻生

三萬圓ばかり費ふて二千圓　葉舟

當時の新川柳諸家の句

ガタクリで灰降る町を捨てゝ行く　久坊
しつとりと太古を抱く神の森　吉之介
一代の五尺に足らず繪卷物　雉子郎
切り倒す時老樹の偉大　椋太郎
天も地も黄色く見える金の番　正次
風樓に滿ちて敗報頻りなり　六蛙佛
ソップにならず三千籠の鳥　花醉
落ち込んだ目に白壁をあざ笑ひ　劍珍坊
大悲劇讀めば暖爐の燃ゆる音　正次
落ちさうになつて短かき岩田帶　花醉
大胸毛臍で途切れて又つゞき　龍馬
あめつちの中に我あり一人あり　雉子郎

飛行隊千里の空を勝ちに乘り　順介
九千年生きても始終氣が咎め　正次
石地藏魅かし始めは抱きつかれ　三太郎
上げ汐のゴミにひとしい五十年　維想樓
一と謀叛なかるべからず花の雨　劍珍坊
雲悲し大振袖が國を出る　正次
うぶ聲を上げる火宅の大都會　維想樓
鳴かずんば斯うだと蟲を下駄で踏み　金之助
さかな屋の猫は化けずに腰がぬけ　かもめ
狼は飽くまで食つて目がくぼみ　正次
竹槍で突き殺ろされる大地主　維想樓
叫ぶだけ叫んで蟬の死は易し　弘美

天盃に眉毛が屆く百五歳　砂の家
日本中皆歩るいても高が知れ　辨天子
青空を睨んで死ぬるぬすと猫　壽丸
何物か摑むが如し斷末魔　燕四郎
神樂堂鼻でうなづく大天狗　狸兵衞
蟷螂の斧とは唐のねごとなり　平八郎
釣鐘を何にするのか武藏坊　維想樓
馬士唄に關八州の日が落ちる　五花村
風雲も呼ばずに夜蜘蛛殺される　弘美
雄大な詩よ白み行く和田の原　正次
大寺の疊はかるた程に見え　雅山
二三本倒すと天馬空を行く　不二郎
腸樽屋大きな蠅を置いて行き　十帆
亡國の大きな山へ日が沈み　狸兵衞
どんな目に逢つても死なぬ立志傳　一軒家
人間の腹から出ても土に入り　維想樓

柳多留三篇の影響するところ亦た大なりといふ可しである、この作者達の中に柳樽寺三篇を讀まない人もあるだらう、讀んで作つては眞似である、讀まずして自づから其時代の空氣に浸り、偶然に自己の主觀を其型、其律の間に盛つたのだから妙である、昔の柳多留三篇を選評した柄井川柳、更にこれを編纂した吳陵軒可有の名はわかつて居るが、かんじんな作者の名が、今の明治大正の作者の如く知れて居ないのは殘念である。

因に云ふ、柄井川柳がこのやうな句を選んだのは、ひとり柳多留

柄井川柳と雄大な句

三篇に於て、さうなのでは無い、彼はその前後六七年の間には、盛んに斯うした雄大な句を選評して居る、柳多留に於て然り、萬句合に於て然り、古今前句集(後に御話する)に於て然りである。

兩國の人のごたつく繩をとき
大空に胡粉でかいたやうな山
奉行職二まい一まい御聞き分け
棧敷まで仁王は、花の禮に來る
ねつてつをあをむいてのむ大天狗
びいどろで二はいあをつて嫁は彈き
御亭主のすき見生死のさかひ也
觀音の千の矢先に五百うそ
大王は笏をのまんず御口つき
大釜へ半分はいる鍋いかけ
にげしなに覺えてゐろは負けた奴

等の強い調子の、それで大きな氣分のする句に當面した時だつた江戸前を自慢にする市井の尋常茶飯事をすら

すり鉢に舞をまはせるいくぢなし
三度まで產婦へ聞いてじれさせる
御親父へそのめりやすがきかせたい
女房へ乳だ〳〵と押ッつける
男湯を女の覗ぞく急な用
男の子はだかにするとつかまらず
夜談義を半坐で母はつれて逃げ

この男の子が裸になつて、着物をきるのはいやだ〳〵と逃げ歩る

社會下層の私生活を句にする

くのが、すでに初篇の「かみなりを眞似て」や、二篇の「着かざつて乳母は」のやうに、いつも題になるのを見ても、この川柳なるものが、これまで多くの文學に取り扱かはれなかつた、下層社會の私生活を、いかなる瑣事でもとりいれたことは、當時の大衆によろこばれた所以であらう、これどころでは無い、もつと下等な、へたに詠んだら正視の出來ない事柄、屁だの糞だのといふやうな言葉を平氣で詩化して居る。

よる夜なか孫を泣かして叱られる
紙二帖寢まきのつまへ持ち添へて
煙管にてよせる屏風のもどかしさ
柳原幕が遲いと石を投げ
野雪隱地藏しばらく刀番

屁をひつておかしくもないひとり者

尙ほ、この三篇にのつて居る句が、私共を魅惑した、と云ふと妙な言ひ方だが、これに感服させられたのには理由がある、修辭に當つて、その語勢を強める可く、一種の助動詞或は間投詞と云つたやうなものが用ゐられて居る、ことさらに誇張した、わざと脅かしたやうな言葉がつかつてある、是れ亦た技巧と云へば云へやう、左に圈點を附して、其證を示す。

御内儀の手をおんのげる鰯うり
火吹竹持つてまき屋をしつ叱り
岡場所のありんすなどはづ横柄
一分だけやり手は尻をどたつかせ
かんざしでつツ突き廻す三世相

助動詞、間投詞の技巧

吸いつけてあつたら内儀ふいて出し
ぶちまけて二タ足にげる炭俵
料理人いつそ池だとつま立てる
晩あたりちつと來たまへみんな下手
乳母が宿齒をむき出して一分とり
尺八で五ッたゝいておつぱなし
乳母が親熊手のやうな手であやし
大三十日こゝを仕切つてかう攻めて
れい〳〵と追手の中に聟の顏
ふんごんで煤をとるのが旦那なり
其くせにろくなものをば連れて來ず

「お内儀」にむやみになまざかなをいぢられてはたまらない、「火吹竹」で叱るは下女、薪屋がいぶる薪を持つて來たから、「ありんす」は吉原の太夫がつかふ言葉、「場末のすべた女郎のつかふ言葉では無い、「吸いつけて」あの美くしい内儀の出した煙管に口づけするつもりだのに、拭いて出した、惜しいことだ、「料理人」はだいどころで何か水を覆へした下女をとがめる、「れい〳〵」と云つたやうな小事件を、言葉の上をした花嫁の行衛をたづねて、と云つたやうな小事件を、言葉の上で、強め、高めてゐるのだ、是れ蓋し所謂江ッ戸兒の江戸ッ兒たるところで、かうした風の川柳は江戸人で無ければ、ちよつと作れない、また古川柳の一特色と見なしてよからう、この柳多留參篇が、私の新川柳興隆にどれだけの關係が有つたかを、ちよつとこゝで云ひたい、それは私の機關の「川柳人」誌上で、昨年末より今年にかけ、更に明年(昭和三年)に亘り連載する『古川柳の新研究』と題する論文

柳多留三篇の影響を受けた川柳

の一章である、今の句を江戸時代の川柳紹介の本に掲載するは筋ちがひのやうで、さうで無い、寶暦明和の川柳の力が、いかに新川柳詩人に大なるものを與へて居るかを證するのは、卽ち古川柳の力寶暦明和の力、委しくいへば柳多留三篇の力を示すものだからである、

明治三十九年から、四十、四十一年にかけて私の當時の機關だつた『川柳』といふ雜誌で、この柳多留三篇の所謂雄渾、壯重、宏大、瑰奇な句が、專ら宣傳された結果は、果して一ッの傾向を新川柳界に直接間接に與へたのである、すくなくとも我柳樽寺(劍花坊が川柳運動の團體名)の句風なる者をかたち作つたのである、乍併第一に其影響を蒙つた私ですら、夢にも柳多留三篇を手本にして作句しやうだの、ことさらにさういふ調子に作らうのといふ氣持は無かつたのだから、況んや他の川柳家、それがたとへ柳樽寺に來て作句をはじめた人であるにしても、決してさういふ意志があらうわけは無いが、所謂これまで一般にさう信じられた川柳江戸前論から脫出し、新らしい天地といふまでに至らずとも、新しい句風を創造しようといふ考への人、胸間卓落の氣を吐かうとした人達が自づからさう爲つたのだらう、なにかなしにさういふ雰圍氣が作られたのだらう、試みに其句風の一班を擧げて見よう、先づ私の句で(明治三十六年より大正三年ごろ迄の)

三篇の影響を受けた劍花坊の句

久米仙が招けど雲は下りて來ず
師を賣たす面ラが揃つてクリスマス
さア俺も死にゝ行かうと鎧を着
身動きの出來ないなりが大時代

三井寺の餘韻湖水へうなりこみ
鶴亀は夫れ青陽のうたひもの
惠林寺の和尚涼しう火にはいり
天之を憎んで長者二代無し
厄介なものを不動は背負つて居る
縄付へ女の惚れる國事犯
薩摩琵琶扇のやうな撥を持ち
圖武六の唐人其名李太白
いつぱいに富士をひろげる淺黄空
小千年書くことも無い日本書記
紺青の海へ胡粉の帆かけ船
蔬菜館天下の薯をあつめたり

御料林天狗のとまる木がならび
王の字の徽章閻魔のシャツポ也
美髯公ひとの二階に四十年
命から離れて木乃伊四千年
廟堂の高きに在りて兜町
羅馬法王を甜めに行く一萬里
萬卷を胸に疊んで居候
空閨を守る男の大あばた
手力雄かたい雨戸をあける氣味
千束にわれは年ふる野干なり
姉藝者苦界十年古狸
うづ高き沒書の中に八右衞門

柳多留三篇と劍花坊

今日になつて見れば、自分ながら面目無い幼稚なものもあるが、作つた當時は、すこしも氣づかず好い氣持になつて、自分の主觀を表現するに其當を得たもの、我より古を爲すもの、劍花坊より之を創めた調子だと自分も信じ、他の人からも劍花坊調なぞといはれて居たが、實は知らず覺えずの間に、この柳多留三篇を讃美し、愛唱して、其影響を蒙むつたのだつた、ひとり私ばかりでは無い、當時の柳樽寺同人たりし人、其他この流れを汲んだ人には、ヤハリ直接に三篇を讀んで、それにかぶれるか、或は私の句調に共鳴されたかゞ看取される、無論藍より出でゝ藍より靑しで、私の句以上の佳句、見方によれば柳多留三篇以上の傑作を得られた人も有る。

花川戸今は鼻緒に馬肉鍋　花醉
村一揆桶に二石の酒盡きて　林鐘子

やかましい晩鐘を聽く駿河臺　劍珍坊
東禪寺和尙を生きた鐘と聽き　飴ン坊
大日本天草産の醜業婦　花醉
大釜に雪を欺むく米の飯　艶殺坊
二三人ばらして其夜土地を賣り　錦丸
いう〳〵と大きくまがる筏乘り　角戀坊
借り倒すいつちしまひに拳銃屋　久米一
大入道八疊敷とひとつもの　花醉
橿原に常世不斷の風の音　雉子郎
歸らんか田園荒れて主義は賣り　小寒郎
こみ入つた風呂敷を着る大和尙　蠻生
三萬圓ばかり費ふて二千圓　葉舟

ガタクリで灰降る町を捨てゝ行く　久坊
しつとりと太古を抱く神の森　吉之介
一代の五尺に足らず繪卷物　雉子郎
切り倒す時老樹の偉大　椋太郎
天も地も黄色く見える金の番　正次
風樓に滿ちて敗報頻りなり　六蛙佛
ソップにならず三千籠の鳥　花醉
落ち込んだ目に白壁をあざ笑ひ　劍珍坊
大悲劇讀めば暖爐の燃ゆる音　正次
落ちさうになつて短かき岩田帶　花醉
大胸毛臍で途切れて又つゞき　龍・馬
あめつちの中に我あり一人あり　雉子郎

飛行隊千里の空を勝ちに乘り　順介
九千年生きても始終氣が咎め　正次
石地藏魅かし始めは抱きつかれ　三太郎
上げ汐のゴミにひとしい五十年　維想樓
一と謀叛なかるべからず花の雨　劍珍坊
雲悲し大振袖が國を出る　正次
うぶ聲を上げる火宅の大都會　維想樓
鳴かずんば斯うだと蟲を下駄で踏み　金之助
さかな屋の猫は化けずに腰がぬけ　かもめ
狼は飽くまで食つて目がくぼみ　正次
竹槍で突き殺ろされる大地主　維想樓
叫ぶだけ叫んで蟬の死は易し　弘美

天盃に眉毛が屆く百五歳　砂の家
日本中皆歩るいても高が知れ　辨天子
青空を睨んで死ぬるぬすと猫　壽丸
何物か掴むが如し斷末魔　燕四郎
神樂堂鼻でうなづく大天狗　狸兵衞
蟷螂の斧とは唐のねごとなり　平八郎
釣鐘を何にするのか武藏坊　維想樓
馬士唄に關八州の日が落ちる　五花村
風雲も呼ばずに夜蜘蛛殺される　弘美
雄大な詩よ白み行く和田の原　正次
大寺の疊はかるた程に見え　雅山
二三本倒すと天馬空を行く　不二郎
腸樽屋大きな蠅を置いて行き　十帆
亡國の大きな山へ日が沈み　狸兵衞
どんな目に逢つても死なぬ立志傳　一軒家
人間の腹から出ても土に入り　維想樓

柳多留三篇の影響するところ亦た大なりといふ可しである、この作者達の中に柳樽寺三篇を讀まない人もあるだらう、讀んで作つては眞似である、讀まずして自づから其時代の空氣に浸り、偶然に自己の主觀を其型、其律の間に盛つたのだから妙である、昔の柳多留三篇を選評した柄井川柳、更にこれを編纂した吳陵軒可有の名はわかつて居るが、かんじんな作者の名が、今の明治大正の作者の如く知れて居ないのは殘念である。

因に云ふ、柄井川柳がこのやうな句を選んだのは、ひとり柳多留

柄井川柳と雄大な句

三篇に於て、さうなのでは無い、彼はその前後六七年の間には、盛んに斯うした雄大な句を選評して居る、柳多留に於て然り、萬句合に於て然り、古今前句集(後に御話する)に於て然りである。

兩國の人のごたつく繩をとき
大空に胡粉でかいたやうな山
奉行職二まい一まい御聞き分け
棧敷まで仁王は花の禮に來る
ねつてつをあをむいてのむ大天狗
びいどろで二はいあをつて嫁は彈き
御亭主のすき見生死のさかひ也
觀音の千の矢先に五百うそ
大王は笏をのまんず御口つき

武玉川と古今前句集

第十五章　武玉川と古今前句集

柳多留九篇以後に進み、安永天明の句風を紹介するに先だち、寶暦明和の全盛期で、柳多留と同時に、或はすこしく前に、或はすこしく後に判行された武玉川と古今前句集を紹介するを便利とする古今前句集の方は純川柳の書物だが、武玉川の方は俳書でもあり又柳書でもあるのである、是れ亦私が前に云つたところの、たとへ川柳と銘打たずとも、川柳の實質があれば、川柳と稱し得ることを證するものである。

(上略)芭蕉翁桃青、初めて貫之躬恒の本情をさとし、李伯杜子美

が骨髄を得られてより(中略)往時元祿の昔より、今に至て世に行はるゝ所の誹諧、此翁の風情を出でず、されど世うつり人かわりて、年々の變化なきにしもあらず、晋子雪中(其角嵐雪)の後、水間沾德花美の風流を聞そめて、世上一判の師と、光彩門戸に至りぬ、續て沾州道に名を鳴らし、今兩側の門人立並びて、をのれをはげみ道の警固をなす、誹諧諸國に盛ん也、中にも江府はその湊として、萬船此地を極る事明らか也、されば日々愚判の卷に秀逸とする句々書留め置侍るを、此度書肆の需に應じて、接に行侍る、右付合の句々その前句を添侍るべき所を、事繁ければこれを略す(中略)玉川の水筋千々に連りて、萬客の朱唇を潤すが如くならんと、目して武玉川としか申侍る。

是れ著者四時庵慶紀逸が筆の武玉川の序文である、李白を李伯、俳諧を誹諧は聊か困るが、ともかく江戸座俳諧の宗匠で、其角の傳統を以て任じて居るだけに、當時としては先づ俳人中の口利きだつたに相違無い、ヤハり前句附の點者となつて評選をしたこともあるから、誹風柳多留と同一の句が多く收められたのも不思議は無い俳諧運座に出席して、迅速に附句をするに便する爲めに著はされた者で

黑主は武玉川からぬすみ出し

といふ川柳があるほど、俳席かせぎの俳人には虎の巻として其懷中に忍ばされた者に相違無い、すなはち十七字句と十四字句とが殆ンど半々に選び上げられたのは之が爲めだ、而して其性質は吳陵軒の柳多留と、時を同うし、趣を同じうして居る、こゝに初篇より六篇までの佳篇を拔萃することにしやう。

俳席かせぎの虎の巻

耻かしい目に島臺をよく覺え

二階から心の人へ咳ばらひ

連歌師の江戸へ下れば花の春

下戸一人戀の證據に賴まれる

男の目にも凄ごい子おろし

又振袖へ戻る孝行

去られても去られてもまだ美しき

鰯がとれて闇の人聲

通りの傘へあたる豆まき

放し鳥とまれと思ふ木を過ぎて

口のうちでいふ念佛がほんの事

背中で蠅の遊ぶ腰ぬけ

三十に成ると女の世がすたる

兩方の目のいそがしきなかの町

湯豆腐のあるゆゑ人の二日酔

稀れに吉田の二階から顔

去られた妻の去りあとへ嫁く

盛りあげられて動ごくこんにやく

宵に寢たところのちがふ浮寢鳥

音頭取話しの聲はきたなくて

白鷺は五位鷺よりも暮れ殘り

四十へ飛ぶは早い一年

約束に砂糖のやうな返事來る

死んで見たれば又と無い顔

寺の謠ひは狐つきなり

今出せば人に耻かし土用干

菅笠の雨に我身を抱いて來る

きり〳〵す都の土となりにけり

隣からはり合ひも無く聟をとり

しらぬ妾を憎む百姓

大根の襟も青い六月

後家の名に石部金吉頼母しき

去り狀でもとのいとことなりにけり

こそぐりに來るたびごとに蚊がはいり

木馬の腹の寒き入相

溜息の向うは燃ゆる火吹竹

氣ちがひの見覺えて居る都鳥

文の長いが損のはじまり

今の女房の請狀が出る

女郎買はだかになつてよみがへり

我顔に惚れて大きな事が出來

勘介と知らぬ間は笑ふなり

二十五は娘の年でなかりけり

產湯へ鹽を入れる蜑の子

十九になつて近い一年

泉岳寺横に歩るいて草臥れる

黄粉に乾く老の唇

うたゝ寢の足へ燃え付く緋ぢりめん

後家に間の無さそうな女房
小原御幸で懲りる太刀持
藤十郎に似た人も死に
九十九夜棒の出さうな闇を行く
佛御前も同じ朝飯
勘當のしるしののこる入レほぐろ
鍛冶屋の弟子の稲妻を打つ
三十三は乳母に出る年
尼になつてもかき立てゝ寢る
二代の長者餅をいやがり
陽炎の中に乞食の五十年

以上は十五篇迄の秀句を拔いたものだ、「九十九夜」の「棒」だの、「鍛冶屋」の「稲妻」だの、「黃粉」の「唇」だの、「きり〳〵す」の「都の土」だの、「陽炎の中」の「乞食」だのを拾ひ出した選者慶紀逸はえらいが、それを作つた句主は尙ほえらい、惜しいかな、柳多留同樣、其作者の名は傳はらない、武玉川は十一篇で『燕都枝折』と命題され、後編といふ形になつた、十一篇を燕都枝折の初篇とすれば、十五篇は、その五篇に當る。寶曆十一年に紀逸は六十八歳で死んだ、二世四時樓紀逸が燕都枝折六篇、又の名武玉川十六篇を板行したのは、明和八年で、其間十年を飛んで居る、武玉川の初篇發行は寬延三年、柳多留發行より十六年前この十六篇發行は柳多留六篇が出た年である、それから二年經つて安永二年、十七篇が出、三年置いて安永五年、十八篇が出て、それで御仕舞だ、『誹風柳多留』は二十三篇柄井川柳の死と共に、二世川柳はだん〳〵狂句への道を踏んで居たが『武玉川』は二世紀逸、依

武玉川の名
燕都枝折

二世紀逸、初世の名を墮さず

然として先代の衣鉢を襲ぎ、發行三冊、而して其結末をつけて居る。

大勢で硯をつかふ天の川

は七月七日、牽牛織女の星合の空。

光琳の繪に寒い振袖

句も亦た清麗、「寒い」の一語千金。

看病の夜寒に探すだいどころ

腹がへつた、夜伽の枕元から、だいどころへ何か喰べるものを探しに行く。

良人の惚れた顏を見に行く

良家の細君が、良人の馴染の藝者などを見たがる氣持は今でもある。

天の與への綻びを縫ふ

處女が意中の人の着物のほころびを縫ふてやる機會が出來たのを狂喜するこゝろもちだ。

心中の檢使もほめる芥子の花

こんなのは、今日の詩人の作にもありさうだ、こしらへものはこしらへものだが。

指先をきれいにつかふ紙細工

鬼灯の鳴る唇の皆薄し

寺中なまめく曠れな霜月

なぞといふ纖巧濃婉なものもある。

春雨に一句解けたる坐禪堂

四月八日にどんな葬禮

なぞといふ哲學的な抹香臭いものもある、乍併、『武玉川』の句は悉

くこんなのだといふことは出來ない、ヤハリ柳多留同樣に、少數の名句の他に、多數の駄句も有つたものだ、『武玉川』の話は大體この位で鳧をつけるとして、この六篇の序文に、前句の解說がある、萬句合や柳多留や武玉川によつて、古川柳を研究しようとせらるゝ諸君の爲めに、其一節を左に拔く。

雅にして興たるべし

（上略）誹諧は、こと更に、句毎に曲有つて興をおもてとなさでは、誹諧の本意に叶ふべからず、さればとて又あながちに俗談平話のみならんもいやし、雅にして興たるべし、景情を宗とすべきにや、付合の事第一なり、尤前句をはなれて、工案する事はなき物なれば、おのづから付かぬと言ふ句はあらねども、其付方前句の體と用とを、よく勘辨して付る事肝要也

人か碇かともでどんぶり

武玉川にも俳諧の俳を誹

深更にあやしき物音は、舟盜人と前句を見て

熊坂が、長刀とても盜み物

と付たり、是盜人と前句の魂へ付て置て、扨一句の曲節思ふ儘に作りたるはたらき、推して知らるべし、只付る事のみを專らにすれば、一句前へからみて、はたらかれぬものなり、仍てこの付物をよせて、句を仕立てる晉子の妙、誠に仰ぐべし。

同じく遊戯文學と見る可きものなれど、たゞ題にばかりたよる作句する者とちがひ、俳諧や前句付は、所謂この附かず離れずを工夫するところから、自づと餘韻餘情を生ずる。　柳多留や、武玉川に名句のあるはこれが爲めだ、尙ほ武玉川の中にも、俳諧の俳が誹に爲つてゐる、さすれば柳多留に冠された誹風の字も、前に記した如く、あながち誹りの意味を含ませたものでなく、其頃は一種の流行

で、俳を誹に書いて居たのかも知れない、併せ記して識者の高説を仰ぐ。

五ツ名のある古今前句集

古今前句集は、武玉川や誹風柳多留にズッと後れ寛政八年に出版された、後に享和元年の頃『柳樽拾遺』と改題して再板され、その後更にまた類題秀句と割書して『柳樽大全』或は『類題誹風柳樽』と改められ明治になつても『川柳大全』として活字本が出た、内容は同一で五ツも書名を持つて居る、書肆の猾手段だらうが、物は決して悪い物で無いどころか、立派なもので、呉陵軒の拾ひ遺したものを、川柳評の萬句合から拔いたとなつて居るが、柳多留に收められた句も澤山混じて居る、古川柳の名句を手ッ取り早く探すには好適な本だ、古今前句集の名は、古今和歌集を擬したので、紀貫之が紀淑望の漢文で書いたのを國文に書き改めた有名な古今の序に擬したといふよりも、口眞似をした、語呂合のすこし毛の生えたやうな序文が卷頭に附けてある。

古今の序に擬した序文

やまとうたのこれもかたはれにして、ひとつ心のたねよりそよろつの句合とはなれりける、世の中のありとあることわざしけきものなれは、心におもひつくことを見きゝするたひに出せるなり、はなれてなくうなひこ水あめねふるにてつちのうちにもいきとしいけるものいつれか是をいはさりける、しぶ茶をも入ずして雨の日のねふりをさまし、めに見えぬへひりの神にもはらすちをよらせ、ふう婦けんくわの中をもなをしすかぬあさきのこゝろもなくさるはこれなり、このまへ句むさし野のひらけはしまりけるときよりいてきにけり、しかはあれと世にいひはやせることは享保のころにはしまりあ

前句のさま六つなり

らたまりて、寶暦のとしのうちよりそはやりける、そのよには
だいのもくもさたまらずむつかしくて、句のこゝろつきかた
かりけらし、近き世となりてそさてあまりむつかしからぬだ
いはいたしける、かくて花よめをめてやぶ入をうらやみ、かこ
はれをあはれみ後家をかなしふ、こゝろこと葉おほくさまさ
まになりにける、とをきところへいそく四ッ手の足もとはか
けこゑの走るにしられ、高きひやうし木の音も番太がひちの
力に鳴りて、犬ほゆる中田圃まて聞ゆることくに此前句もそ
のとくなるべし、そも〳〵まへ句のさまむつなり、はいかいの
ほくもかくそ有へき、そのむつがひとつにはそへの句

わかとのができて一夜にさくぼたん

といへるなるべし、ふたつにはかそへの句

はすのみのとぶを見ていゐるかゝり人

といへるなるべし、みつにはなづらへの句

あの子ならさんひやく出さふ佛たな

といへるなべし、よつにはたとへのく

ていれしたよりも野菊か御意に入

といへるなるべしいつゝにはたゝことのく

くふときはおいらもこゝの子にならふ

といへるなるべしむつにはいはひのく

一生の極さいしきは嫁入の日

といへるなるへし、いまの世中色にそみ人の心あたになりに

けるより、さしあひの句たはれしことのみいてくれは、むすこ

のへやにむもれ木の人しれぬことゝなりて、まめやかなるお

川柳と露丸を人磨赤人

やぢのまへにはあさかへりのなはしにならぬことゝなりにたり、そのはしめを思ふにかゝるへくなんあらぬ(中略)むかしよりかくつたはるうちにも、しんぼりばたに川柳てふ人なん前句のひしりなりける、これはてんしやもとりつきも力をあはせたりといふなるへし、秋の夕部大川にとまかけて行船をはみな人の目にまんちうと見て、春のあした奥女中のわたぼうしは、かはやなきか心には雪とのみなんおほへける、又山の手に露まろといふ人ありけり、これもあやしうたへなりけり、されとかはやなきは露まろかしもにたゝんことかたく、露まろは川やなきかかみにたゝんをかたくなんありける、此人々をおきてまたすくれたるてんしやも、くれ竹のよにきこへかたいとのより〳〵にたえずでありけるそのころ、かち句をむつめてなむ柳たるとなつけたりける(中略)寛政七年ふん月なかは、すきのともたちみつからひきひろけてはなん、それか中に櫻をうふるより土手のほとゝきすをきゝ、二度の月雪見としの市にいたるまて、またつるかめにつけてもとみのけんとくを思ひ、人にもいはすみそはきけいとうを見て草市をまちあすか山にいたりてかはらけをなけ、あるは春夏秋冬にもいらぬくさ〳〵のまへくをゑらひて、ちゞはたまきなつけて古今前句集といふ(下略)

浅學の爲か輕蔑か

もとより名文として褒め稱へるほどの物では無い、古今の序もどきに詩の六義を貫之調で書いたのはよいが、其體裁を眞似たゞけで、前句附の六義といふ程ならで、モウすこし深く區別的に解剖したら面白かつたのだ、それをしなかつたのは、蓋し其淺學なるが

爲めか、或は「高が川柳くらゐ」と輕蔑して、いたづらに狂文のつもりで書いたのか、川柳を人麿に、露丸を赤人に比したのは、文勢の双開法から對にしたのでもあらうが、前句點者としての露丸が、川柳に次いでは……と一般から見られ居た證據には爲る、古今前句集は類題である。

春之部

禮帳に德兵衞とこそ書かれたり
寢せ付ておりはの乞目呵りに出
下戸の禮四谷赤坂麹町
奥中へ一鹽あてる花の雨
門松も甲らに似せて穴を堀り

「禮帳」の初筆は武家なれば福德壽太夫、町人なれば德兵衞、正月の緣喜を祝ふ、「おりは」本双六よりも、博奕の出來よいおりはをする、双六盤で、大町人の家庭、「下戸の禮」上戸なれば、屠蘇に足をとられて、一日に一二軒がやつとである（江戸時代は年禮に大凡そ一ケ月を過ごした）が、下戸なればこそ、これだけを駈け廻つた、今日のやうに電車、自動車の時代とは違ふ、「奥中」は雨の爲め、大名の奥方の御花見が取止め、御殿女中大失望、「門松」は身分家柄により武家に町家に大小長短。

四谷赤坂麹町

夏之部

夕立を四角に逃げる丸の内
甲冑をたいした所へ暑氣見舞
次男へはへろ〳〵武者にのしをつけ
梅干に餅の戸板を染め直し

「夕立を四角」丸の内大名小路の江戸はかうだつた「甲冑」武家の虫干に、鎧など着てゐるところへ頼もう、これは大狼狽「次男」へは安い武者人形を贈る、封建時代の總領(長男)尊重は、ひとり武士の家庭ばかりでは無い、昔は「梅干」も餅つきも、家庭々々ですることいふ餘裕が有つた。

封建時代の長男尊重

秋之部

そうめんは皿の中にて袖たゝみ
月へなげ草へ捨てたる踊りの手
坐頭金十五夜お月見でおどる
堀江町風しづまつてさつまいも

「そうめん」を賞翫した江戸、氷水に飽く東京、「月へ投げ」は盆踊り、もう今日の東京には見られない、「坐頭金」は幕府の盲人保護政策で、坐頭の金貸しの酷烈は大目に見てゐた「堀江町」で夏は團扇を賣り、秋は燒薯を賣つた、今の氷店が薯屋になるやうなもの、

冬之部

よつぴてい地主の餅で寢つかれず
十月は十萬兩の飯を食ひ
年の市弓は手桶にをさめたり
いつはりは人間にあり室の梅
大晦日儒者平仄があはぬなり

「よつぴてい」は徹宵、地主の餅つき、長屋の安からぬ夢、「十萬兩の飯」は惠比須講、「弓は手桶」は破魔弓に太平の象、「いつはりは」昔にも溫室が有つた、正月の爲めに梅の花を咲かせる、「大晦日」今も昔も哲學者の貧。

今も昔も哲學者の貧

賀之部

後家の齒を色あげさせる一家の衆

島臺の梢に見える嫁の顔

丸わたをとると上下横へむき

醜婦で上下横へ顔をそむける

仲人にかけては至極名醫なり

本所から出る振袖は賀を祝ひ

「後家の齒」今の若き人には夢にも知らぬ事、人妻となれば若くても鐵漿をつける、後家再び人妻となる時、更におはぐろの齒を染め直す「島臺」も今日の婚禮には、たゞ膳へ松立てた形ばかりの物、昔は島の形したる大盤へ松竹梅、高砂の尉と姥、それに肴果を盛りたる物、その松の梢あたりに花嫁の顔「仲人」は江戸の町醫者、よくこれを爲す、蓋し病氣には決して名醫でない「本所」の吉田に町下等淫賣が居た、振袖を着ながら、實は四十二を祝ひさうなのが客を取つた。

離別之部

松ケ岡あひみ互ひの癪をおし

すりこ木でぶちまゐらせと里へふみ

しんこんにてつして聟は出る氣也

「松ケ岡」は鎌倉の東慶寺、尼寺、縁切寺といふ、ひと妻此寺へかけ込んで三年居れば其良人から離別がとれる、女權の擴張されてない舊幕時代にも「すりこ木で」良人を「ぶちまゐらせ」た婦人が有つた、今の聟は「しんこんにてつし」なくてもさつさと出る。

羈旅之部

日本のことばを知つて腹を立て

諸國からふくれた顔は馬喰町

名物の内だと御油ですゝめてる

川どめにてにはをなほす旅日記

名物を食ふが無筆の道中記

兩の手を出して一見の物がたり

輕井澤膳のなかばへすゝめに來

旅馴れぬうちは桑名で口を燒き

今日の汽車旅行には、この昔の旅行趣味は無い。「日本のことば」は多く長崎の和蘭人、「諸國からふくれた顏」は、訴訟に出た地方人、馬喰町には昔から地方人相手の旅館が多かつた。東海道の「御油」の名物も、中山道の「輕井澤」のも、飯盛といふ旅賣女。

東海道中山道のとんだ名物

戀部

出雲から叱られさうな緣結び

地紙賣油壺から出て歩るき

論語よみ思案の外のかなをかき

かの後家に和尙桂馬とうたれたり

家老とは背中合せの美くしさ

厚木から置いた女でもめかへる

仲條へ行くより外の事ぞなき

仲條で發端からの事を云ひ

肴屋の猫の氣で居る奧家老

こそぐつて早く受け取る遠眼鏡

「出雲」の神の緣結びに從がはぬ自由結婚、昔にも有つた「地紙賣」といふ色男、赤繪や錦繪にのこつて居る「家老」とは背中合の殿の寵妾、「厚木」は相摸國、この邊から江戸へ奉公に出た女、相摸下女として好色

墮胎專門の不正醫師

川柳の題になる「仲條」といふは墮胎專門の不正醫師、昔は堂々と…でもなからうが、ともかく門戸を張つて居た「さかなやの猫」のごとく女には手を出さぬキンカあたまの奥家老「遠眼鏡」がいちばん戀らしい句。

哀傷部

かゝり人樽ぬきにして葬られ
片棒をかつぐ夕べの河豚仲間
首くゝりつらあてにとはたはけ也
泣く〳〵もうかとはくれぬかたみわけ

哀傷には今も昔も無い、かゝり人の死は棺桶にも及ばず、つらあてに首をくるゝ人間もよく新聞の三面へ出る。

釋教部

大佛は見るものにして尊とます
善人が有るので龜がむごくされ
平内は神と佛のまぎれもの
借りた故俗の談義を聽く御寺
弘法のふりで四五日喰ひ倒し

「大佛は」鎌倉のも、奈良のも、昔からさうであつたのだ「善人」は放し龜「平内」は淺艸の石像「弘法のふり」は、昔のよく弘法大師が乞食僧に化けて其町或は村で何か求める、それを與へぬと、其土地に其物が永遠に無くなるなぞといふ迷信が有つた、それを利用した騙り坊主。

神祇部

一萬度大きく守り玉ふなり
元日に關八州の毛をひろひ

神主は人のあたまの蠅を追ひ

福祿壽四五人前の頭痛がし

正一位でつちに告げてのたまはく

女神先づ叱られたまふ世の教へ

艸も木も寢るに女の神詣で

「八州の王子の狐火」

「一萬度」は御百度を百度した萬度石、「元日に關八州」は王子の衣冠榎へ八州の狐が集まるといふ、大晦日王子の狐火の傳說、「神主」が長柄の幣束で參詣者の頭を禊ふ、「正一位」は初午と丁稚、「女神」は天の浮橋「艸も木も」は丑時參り。

古今前句集の生命は、これからの故事部、戰場部、靑樓部、にあるが、戰場、靑樓、戲場等は、後の詠史川柳、社會川柳の章に讓り、こゝに古川柳書籍中で、最も多くの佳句を集めたといはれて居る故事部を紹介するだけにとゞめる。

神代より日月今に地に落ちず

御釋迦樣生まれ落つるとみそをあげ

夕顏の中にかぼちやはまかなくに

惡龍の中に裸の立すがた

分散に世をうつせみのからだんす

氣づよいと氣の長いのが九十九夜

片假名に四角の文字は手をひかれ

惚れた同志留守にのこんの雪の肌

子はこたつ親仁はころぶところまで

五條には夕顏らしい宿も無し

すがゝきに咸陽宮の灯がとぼり

昔から知れぬで人の命なり

朝夕にくへばこそあれ米の飯

さればこそ人の候ふ柿のかげ

西行も風呂敷ほどは世をのこし

吳魏蜀の一ッはなれて木挽町

陽虎ではござりませぬとのたまはく

人同じからず花見の仲間われ

下女が部屋これなんめりと忍びこみ

長芋の風味寛仁大度なり

孝靈四年あれを見ろ〳〵

北てきの爲めにゆう里にとらはれる

御めかけは日々に靈驗あらたなり

坐敷牢時に范蠡伯父き也

夜といふ扁に烏だと笏で書き

はいかんを道々くだく朝がへり

所謂『古句とり』なるもので、句中に漢文、國文、漢詩、和歌の成語を取り入れ、其詩を古典的に、格律を渾厚にする手段を用ゐたのだが、造語雄健デカ味と強味とをうまく融合させ、しかも小體大用の滑稽味で、直に人心を打つ者がある、「神代より」や「御釋迦樣」や、最も莊重に豪宕に出來てゐるが、其間に頗る深刻な、頗る婉曲な諷刺がある、「夕顔」の花に交つてカボチヤの咲く世相を見、「分散」のあとの「たんす」を輕ろしみ、「惡龍」に志渡の浦玉取りを劇的美化し、吉原を「咸陽宮」と形容し得たり、「吳魏蜀」は市村座、中村座、守田座の三ッを離れて山村座の存在を云ふ、「長芋の風味」は大味の大家の若旦那を云ふ、「孝靈四年」

小體大用の滑稽味

遊里を咸陽芝居を三國

は富士山の涌出、琵琶湖の行潦。

以上の句を以て、單に川柳が明るい、輕快な、淡い、笑ひの文學である證據だとする者は、其一を知つて知らざる者だ。

身の上にふと氣がついて夜が長し

町内に人は無いかとぶたれ損

姑婆鎌倉さして追ふ氣也

二十四孝の外に傾城

腹の立つ事ばかり聞く寢ずの番

關とりの出て村に物入

木綿もの着るが悟りのはいり口

考がへさせる川柳

この七句は、卷尾の雜の部に在る、この句どもを讀んで、諸君の内に、これまで豫想して居た川柳のちがつて居るのを感じられる人もあらう、多言はしない、有眼有識の讀者よ、看よ

こゝで私は中言をする、たゞの川柳史なれば、うるさくこの句解めいた文字は入らぬことだが、たとへ初心で無くても、川柳には川柳の詠み方が有つて、難解になるので、簡單に入註した、いたづらに文飾を誇るのでは無いことをことわつて置く。

第十六章　破格から墮落へ

成功を急ぎ好奇に走る

明治、大正、昭和に亘つて、常に川柳革新が唱へらるゝに拘はらず尙ほ一方に守舊無識の徒を跋扈させて居るのは、多くの理由もあらう、進歩に對する保守、革新に對する守舊、破邪に對する頑冥、顯正に對する妨害、そんなこともあらうが、別に倦んで動かんとする者、停滯に堪へず向上せんとする人々が、成功を急ぎ、好奇に走り、終に軌道を離れて、川柳以外の道を擇ぶに至つたりしたことも、また、其一源因ではなからうかと思ふ、寶暦明和の川柳が、安永天明の瑰奇破格の爲めに、一時の變革で目新らしくなつたが、結果は改惡に墮して行つた前車の顚覆は、我々革新川柳に志ざす者の大に鑒がむ可きことだらうと思ふ。

猛然と五七五調を破る

寶暦明和の五七五調を、猛然と破格した、其最なる者は、柳多留十五篇である。

やれ悲しい事だはと母は抱き
しきみをねぎるやつは嫁をもいびり
てんとうさまがゆるさぬと親仁云ひ
毘首羯磨の作ともいふやうな下駄
天狗ふりつけて入道踊るなり
あざをまじ〳〵見るとよめ消えたがり
そこでいはれざよしなよとむごいやつ
喰ふとねむたがるはよそから來た夜伽

大喝一聲筍を捨てゝ逃げ
驕りがましき事の無い角兵衛獅子
くろはこうとうむらさきはそんなり
嫁の屁をきいたものは長者になる
鶴は變な物並びに角兵衛獅子
蟬がなき出すと御世話に成りました

但し十五篇ばかりでは無い、その前にもちよい〳〵見えて居たその後は無論のことである。

越後の謙信かけね無しのいくさ
つよいどろぼうもないもの石燈籠
とん〳〵三味線のいとがありやすか
なべの〳〵のそこぬけきやくゑきへ來る

川柳の各組連詠み込み

常香がきえてかへり〳〵小言
肱をまげ枕とし乳ほうばらせ
かういふもんじやだとはぎへそ引きこみ
すね右衞門をとらへた甲斐も無く亡び
梅に鶯　櫻に　生　醉　なり

而して、この時選者柄井川柳の態度は、どうで有つたかといふに、柳多留十六篇の序に、發句ともわからない、今の言葉でいへば俳句とも川柳ともわからぬ月並十七字で、各連中へ對し、大に八方美人的の愛嬌をならべて居る。

うしの年ばかり取次顯はして
永坂や柳の水の蔭清し
蓬萊や御納戸町の風薰る

四谷に羽ねをのした鳳凰
三河町そのゆかりあり杜若
風雪森と夜るの丸山
廣小路までもいろはの茶の薫り
二本えのきに古き水仙
旭まだらに兩國の霜
名木の薫りをしたふ春木町
高根白々さくら田の冬
新堀馴てわかなつむ友
八重垣に雷門の和らぎて
春日町にも曲水の宴
不斷さくら木山下の榮

もとより編輯者吳陵軒などの要求で詠んだものだらうから、これを以て川柳の詩才を疑がふことはよくない、またかうした詠み込みなどに名句の出來ないことは古今同じだらうが、さりとて彼の名譽、彼の選眼に於て、かゝる者はあらずもがなと思はれるのである、且つ十五篇の卷頭に各團體名の中で、山之手組の飯田町錦、青山眞砂、赤坂紅葉、本郷下谷組の本郷古月、千住登等が詠み込まれないのは、丑年(天明元年)には出句しなかつたのか、また寶曆明和に其盛を極めて居た市谷初瀬連の名が見えないのは注目に値する、尙ほ當時の川柳作家等も、だん〳〵個人の賣名を考へるやうに成り、選者川柳から斯うした團體へ對する總花をふり蒔かれたに滿足せず、追々作者の名を刷物にしたがる傾向も出來たと見え、柳多留十篇以後特に角力會なる者が催され、それが附錄のやうにして掲載

作家が個人賣名の慾望

されることになつた、どういふ人がどういふ句を作つて居たかもわかつたことは、古川柳研究の爲によろこびである、十四篇に安永八年春の角力會が八會まで出て居る。

とんだいゝ間だのに娘うウぢうぢ　御幸連　一甫
つら中が暦でむす子いやといひ　玉川連　川里
船宿へ上下を積む大一座　櫻木連　遊里
精進日もう何時か〳〵　柳水連　其水
にぎられた片手疊をむしつてる　風雪連　古泉
あいいやでありんすを聞き拔き放し　牛込連　泉河
あま茶の錢じやアいかぬ初鰹　櫻木連　木綿
白ッぽく田植に嫁の目立つなり　風雪連　古泉
子どもの目には面白い涅槃像　玉川連　五鶴

吳陵軒可有の柳號

あまり好い句は無い、柳多留に顯はれた作者の知れた川柳には、概して佳句は無い、この中に在る櫻木連の木綿は、卽ち柳多留編者の吳陵軒可有其人だが、彼が自分のこしらへた本へ自分の句を自分の名であらはすのだから、もすこし佳い句を、といふのは今日からの考で、他の連中や、及び自分の連中の人々に對してもそんなことは出來なかつたのだらう、これに先だつて十篇にのつた角力會の句のも、彼れ木綿の名であらはれた句は

琴の音も止んで格子でわるい咳
十かへりの松だと牽頭（タイコ）わるッ口
市に寄り愈々つみがおもくなり

といふ三句だけだ、これを前に示した明和六年の組連句合にあらはれた句に比すれば、はるかに劣る、但し吳陵軒にはこれ等の句が、

今日で私どもが思ふほど拙づくは思へなかつたのだらう、この十篇の角力會は、安永未の春とあるから、四年だ、明和六年から安永四年は足かけ七年、滿六年の隔たりで、これだけ句が拙づくなつて居る。

覺悟が無く目的も持たない

乍併、私がこゝで斷わつて置かねばならないのは、寶曆明和の古川柳が、だん〳〵狂句に墮して行く經路は、決してこの破格が原因では無い、破格も右に擧げた十五篇の分のなどは、まだ好いが、だんだんわるくなる、この時若し此等の前句附點者や作者達に、今日私ども革新家が考へて居るやうな、より良くしよう、より藝術的なものにしよう、社會詩として、より立派にしようといふやうな覺悟と目的とが有つたなら、たとへそれが狂句、柳句と改稱されたにせよ、一句立てにしようといふ考へは、ぜんたいわるいことでは無いから、寶曆明和よりも以上のものが出來、和歌、俳句と對照して、優るとも劣らないものと爲つて居たかも知れないが、この時の川柳家は、たゞ奇を衒ひ、俗に媚び、虛名を求め、褒美をよろこび、いたづらに遊戯的大會を催し、多數の人間をあつめて、われがちに盛會を誇稱し（後に實例を擧げる）以て自ら得たりとして居た爲め、此の如き結果になつたのである「破格より向上へ」とならなければならないのを「破格より墮落へ」に押し進めたのである、後の人これを考へないと、また後の人をして後の人を笑はせるだらう。

遊戯的大會の誇稱

眞珠を再び豚の餌桶へ

第十七章　柄井川柳の晩年と其後

前句附の選者として、大衆の渇仰を受け、終に前句附を一句立テの句となし、後世をして其名を其詩の名として殘した程の柄井川柳も、あまりに手腕の買被りをされ、崇められ、煽てられたのが禍になつて、あたら眞珠を再び豚の餌桶の中へ投げ込む事となつた、試みに誹風柳多留十九篇、二十篇を讀んで見るが好い。

女房を恐ろしがつてたゞ歸り
吉原がいつち下直と初會ぎり
色をすることは芥のごとくなり

西行と五重の塔をほしかため
片目だがきりやうはよいと仲人云ひ
後家の質男物から置きはじめ
どろばうはならぬとさがす火打箱
放れ馬二階に居ても戸を立てる

といふやうな、やゝ面白いのもあるがいづれも淺薄で

いやならばいゝに若後家異見する
さすがは女眉とるを瞽女惜み
下女の戀ふみもへつたくれもいらず

と云つた類のものが多い。

壁訴訟したら末世に本は無し

秦の始皇が、書を焚いた時、當時の書は、今日のやうに紙へ筆で書い

たので無く、竹を編み、それへ文字を彫りつけた竹簡だつたから、これを壁に塗りこめて、書籍押收の目をのがれた、といふ故事に基づき、壁が物を言つて訴訟したらば……といふ團子理屈と緣語の洒落、卽ち後に狂句となつた手法だ、此際特記すべきは、吳陵軒可有の死である、彼は天明六年三月の角力會には催主淸江、一口の後へ補助木綿として署名して居る、またそれを掲載した柳多留二十一篇の卷頭に左の文がある

吳陵軒の選眼

此篇の初丁は、十四五とせ以前迄此道に名をとり給ふ若ての上手名吟多かりしに、おしいかな世を身まかり給ふ、予うろ覺えながら彼秀吟をかきあつめ顯はせしは、御なじみのかた二十一篇の御回向あれかしと願ふのみ、

お妾のむつごとくれろ〳〵なり　淺草紅梅

高つきの菓子が屏風のあるじ也　小石川　車十

持參金出るはれ見世で笑止がり　番町　梶葉

かんざしでかき〳〵車力いひこめる　神田　嵐巴

江戸家老若衆根性出したがり　下谷　冬始

はやり醫者一かたまりに睡らせる　市谷　萬鼬

氣ちがいのそれからたえぬ角田川　麻布　龜甲

庚申は横にいつてもけどられる　柳原　千雀

車にてしきみ淋しく引いて行く　下谷　井印

嫁の髪巳午の間にやつと出來　青山　仙郎

雨やどり子の行けといふ氣の毒さ　麻布　きぬた

晝着ない小袖は內で出來ぬなり　本鄕　鐵砲

大とく寺水にはあはぬ所の名　青山　五盛

子のねびえよく日夫婦喧嘩也　麻布　似竹
二またはわけてはたらく土大根　丸山　百菊
あれにはなぬしがござると神馬引　下谷　緑枝
踊子の母にくらしいせきばらひ　八丁堀　月桂
身の重いうちはおはちも下さつた　下谷　陀陸
冬の田は山葵おろしのやうに見え　本郷　中菊
お妾はばちばつかりで利生なし　本所　淺裏
ひのへ午のとし末秋

吳陵軒可有の死

からす瓜垣根の外の命かな　吳陵軒囘

この丙午とある天明六年から十四五年前と云へば、明和八年或は安永元年の頃、働いて居た柳人だ、その一生を代表する句が前顯の通りだといふので吳陵軒の選眼を類推すると、アマリたいしたものでは無い樣だ、彼の功は多かつた、と感謝すると同時に、佳句を沒して、拙句を世に出した罪も論せなければなるまい、乍併功は錄す可し、罪は言ふ可からず、其吳陵軒も其次の二十二篇の卷尾には

辭世　五月廿九日　木綿居士

雲晴れて誠の空や蟬の聲

右追善會柳樽廿三篇へ加入仕近刻出板　二代吳陵軒

といふ附記をされて居る、天明八年五月二十九日に死んだことになつて居る、だから二十三篇の序文は如猩といふ名が書いて居るさうして約束の如く翌寛政元年の秋催された追善會の句がのせてある、二代目吳陵軒といふのは、どんな人だつたか知れない、この追善會の追加に

言の葉の茂る手向や一めぐり　語涼軒

柄井川柳の死

といふのが見える、それと同人だらうか、この呉陵軒の死に後るゝこと二年、寛政二年九月二十三日には、柄井川柳が、七十二才で死んだ、彼が最後の選は柳多留二十四篇に酉(寛政元年)八月十一日開き、川柳評とあるのがそれだらう、この二十四篇の序には

功成名遂佛國へ身退れし新堀の先生年々撰の萬句合より柳樽今年に至り二十四篇に及びぬ猶また此餘の秀句を後篇として部分にて出し好人の御求を希而已　花洛庵一口

川柳追福三評句入

として在つて、花洛庵はどういふ人物だつたか、わからない、卷首に川柳の像が出て居る、その最後の選句には。

ぶどうを食ひしまひ灰吹をすてる　狐聲

川柳の後繼に和笛

ひげつらであま酒をのむみともなき　一口

風上みにすわり闘取叱られる　中葉

といふやうなのがある、川柳死後の柳多留は、その二十五篇の序に

年々歳々華相似たり、盡せぬ水の言の葉に、柳の老木枯果てゝ此道既絶なんと、時に笛先生なるもの川叟の俳風を慕ひ、是絶たるを繼ぎ捨れたるを起す聖教に叶ひ翁の選評にひとし、社中誠に闇夜に往て燈に逢へるが如く、歡喜の美諷〳〵と耳にみてり、予進で家名喜多留廿五篇となしぬ、

寛政六のとし秋　市中庵主述

笛先生は川柳と同じく前句附の選者だつた和笛である、川叟といふのは、川柳に對する敬稱だ、和笛は二十五篇より二十九篇までを選んだ。

今日もまた留守でござると諸葛亮　完示

柿盗人を呼生ける馬鹿な事　狐聲

星の名を二ッ覺えるすゞみ臺　一德

病上り或夜女房に叱られる　丸水

傾城の涙で内のくらが漏り　器水

花の敵を雪で打つ本望さ　如雀

もういくつあがると雑煮聞合はせ　五連

といふやうな風で、調子は落ちるが、いづれも寶暦明和の餘韻をとゞめ、狂句は有つても「花の敵」で忠臣藏を詠む位の風で、まだ上品だつた、その和笛は享和三年か、文化元年かに死んだらしい、柳多留三十篇の序文は

寶暦七丑どしよりの頃より、川叟初て萬句合の催しありしより、年々日々のはんゑい言葉につくしがたく、一會の寄高二萬五千六百餘員に及しは、實に稀代の判者といゝつべし、其の秀句柳樽廿四篇に滿、五々の編より二十九篇までは、和笛子の評なりしを、予又古翁の選置れし句々にて三十編より嗣編して、諸君の御求覽をこひねがふのみ、

文化元子年　花洛庵一口誌

として、句主無しの句をならべて居る。

物着星大たばに出る夜着ふとん

日は西へあつさは石に殘り居る

好色な男はけつく妻持たず

小便も此やしきではこらへる氣

まよい子の札あく筆ではんじかね

下手のよむ本は鼻からふしがつき
いんろうの中で目出たく毛がはえる
人間の巣立ちなるべし宮まゐり

退歩驚く可き選眼

これが卷頭の句で餘は推して知るべし、川柳晩年の選評にかゝるもので、これを柳多留初篇、三篇頃に比べると退歩驚く可きものがある、私は柳道の祖翁とまで、其尊信者から立てられてゐる柄井川柳の爲に、これを掲げるに躊躇せざるを得ない。

文日堂礫川の人望

三十一篇は「一口子の志を繼で」と稱し、玉章(これも當時の作者で、角力會には出て居る)が、故川柳が各地の神社奉納の額などの選で、一卷を爲し、卷尾に和笛の追善會の句がのせてある、三十二、三十三篇を經て、三十四篇に至り、文日堂礫川の名が、殆んど川柳の志を襲ぐ人の如く、推薦されて居る、其一篇は、悉く文日堂の選句で埋まつて

二世川柳の襲名

居る、が、彼には自ら川柳を稱する考は無かつた、さうして柄井川柳の長男幸孝といふを擧げ、二世川柳を襲がせた、さうして自分は矻々と句選、句作をして居た、三十七篇の序に菅裏と云ふ名で

今や名だゝるこいし川の文日翁は、いにしへの川やなぎの正流にして、今の柳と枝川をまじえてむつみ深し、その翁のゐらめるは、彼すぐなる柳の正風にもとづきて、いやな風になびくことなく、五風十雨に此道のみのりを願はるゝものから(下略)

なぞと推稱して居るが、うつかり煽てにのらなかつたらしい、二世川柳の名が柳多留にあらはれて居るのは三十五篇の序に『今年二代の川柳、親の柳の根を續ぎて、角力ざれ句十會を催し、其句々を拔萃して、三十五篇の前句集成りぬ』とあるが、實際自ら柳多留の選に當つたのは、四十篇からだ、私はこれを明治年間、古い狂句屋から聞

いた、而して今『しげり柳』といふ明治の初め狂句者の手に成つた書を見ると、ヤハリ其通りだ、

（上略）二世川柳、在世柳樽四十より、六十篇を判す（下略）

とある、口から口へ傳はつたのだらうが實説らしい

猿の子を犬の補佐するつぶれ前　　曉鳥

といふ豐臣秀頼を前田利家がたすけた、といふ狂句がのつて居るので其一班がわかる、これは如雀といふ社中の人の選で、自分の選には

眞ン中に蓬萊山の四里四方　　志丸

といふやうなのを高番句に取つて居る、無論御江戸自慢の、徳川樣禮讃だ、文化四年にいよ〳〵二世川柳も宗匠らしくなつたと見え、柳多留四十三篇の序は、また菅裏によつて、左の如く語られて居る、

御江戸自慢
徳川樣禮讃

其二世繼承を家屋の建築に譬へて

草庵をいとなめる川叟の助力をなさんと、四方の諸君、詞の林を山の手に切出せば、下谷につみ流し、神田に地ならししては、つき地に地祭りし、かの五七五のかずなる良材を、手々にふんで（筆）の斧に工みして、すゞりのすみかねなる評をうけて、一字の冊子となれる、其入口に柳多留四十三篇の額をかけて、月雪花の此うちにある事を菅裏が案内す

さうして雨夕、三松、未學などの選があり、副選といふ形で文日堂、主選が二世川柳と爲つて居る、その拔句の中には、後の四世川柳と爲つた人見賤丸の名も見え、文日堂も無論礫川の名で出して居る、

總卷軸は

林にもあまる茂りや冬木立　　文日堂　礫川

世の中の恵みをうけつ歸り花　川柳

川柳の卷軸に月並俳句

といふやうな俳句とも何とも得たいの知れないものが並んで居る、尤とも狂句になつて、殆んど卷軸はかうした月並俳句である、ヤハリ前句卽ち川柳は、俳句の前には不眞面目な物といふやうな先天的思惟が有つたらしい、自ら侮どつて人これを侮どる、古川柳の眞珠が、再び豚の腹に戻つたも宜なる哉だ。

自ら侮りて人之を侮る

二世川柳は、斯うして兎も角も柳多留六十編までの編輯をしたが決して自分の選だけで、全篇を占領する、といふと可笑しいが、持つてゐるといふとは無かつた、文日堂はいふまでも無く、青露、シクト、千慮齋、ヤマキ、芋洗、亭々、志丸、狐聲、菅裏、簀山、子明、雨夕、如雀、梅鳥、巾布、玉章、山猿、岩猿、里梅、柳鳥、振袖、梅桝、河陽、鬼柳、柳雨、五友、艸人、有幸、十賀、登川、横好、東猴、朝潮、遊高、松歌、里梅、是樂、金牛、錦鳥、和文、志夕、板人、亦

三世川柳の選評を拒絶す

樂、賤丸等の多數の選者に打ち交りて選をして居た、さすがに卷尾に控へては居たが、何だか「川柳評」の三字が見すぼらしかつた、狂句者流の著はした本に二世川柳の死を文化年間として其詳細を云はない、さうして其弟、卽ち初世川柳の次男八藏を擧げて三世川柳となし、やがて事故有つて社中より選評を拒絶した、と書してある同時に人見賤丸を擧げて假選者にしたともある、賤丸の選者になつたのは、柳多留五十八篇からで、これには十返舍一九が緒言を書いて居る、

味酒の三輪にあらねば、杉ばやしたつる門にもあらず、版元の花屋のしるしは柳樽の汲めども盡きず、跡ひき上戸の何篇もくり返して、今五十八篇の大盞引受たる志津丸子の手際は、すつぱりえらみ出せる句々は、みな一本木のまじりなし、予も飯

十返舍一九の柳樽序文

よりは好の道、此酒の美味を感じ鼻のさきをひこつかせてかくの如し。

文化辛未　十返舍一九誌

これで見ると、書肆花屋に頼まれて一九が書いたので、賤丸を知つて居た譯では無いらしい、志津丸と書いて居るのは洒落とも見えない、而してともかくこの本は賤丸が著者として出したとなつて居る、さうして六十篇の出た後に二世川柳は死んだとしても、其追善も催されて居ない、まだ衆望が歸しなかつたのか、さうして文化九年十月二十七日には初世川柳の三十三回忌が、春日堂礫川の隱宅に於て開卷された、そこに六十篇を最後として六十一、二、三篇に見えなかつた川柳の名が出て居る、これが三世川柳ではあるまいかと思ふ。

川柳の字畑と爲る

言の葉のあとなつかしき枯柳　文日堂

果はみな出立つ道に落葉哉　川柳

文日堂のは、柄井川柳の辭世に

こがらしのあとで茅を吹け枯柳

とあるのから着想したのだが、川柳のは我身の運命を暗示したとも見られる、其「川柳評」の三字は六十八篇に於て卷頭高番に

君臣和して笑はせる松の内　茂ル

中軸中番に

飯はよいものと氣のつく三ケ日　可笑

大尾の末番に

まんめんにゑみをふくんで下女承知　錦里

を掉尾の花として(六十九篇にもあるが、貧弱だ、七十篇は今、手元に

無い)七十一篇以後には、川とも柳とも跡をとゞめない、烟の如く消えて居る、社中から選者たるを拒絶されたのであらう、而して七十二篇以下は賤丸評が堂々と卷軸に納まることに爲つた、但し初世川柳の餘威は、なほ柳界に加はつて、柄井家以外の人が川柳と號することは、多數の川柳家の胸にも、何となく濟まないやうに思はれ、賤丸自身にも多くの人の上に立たうといふ野心が有るだけそれだけ、君子顏をして居らなければならなかつたらしい、假判者の名は、數年の間彼をして恭謙なる態度の持主たらしめた。

賤丸の假判者

第十八章　江戸川柳墮落の經路

狂句元祖四世川柳

三代目川柳を屏息させ、賤丸假判者の局に當つたに就ては、八丁堀の同心人見周助此處官權濫用の事は無かつたらうか、とも疑はれるが當時の(其時の)川柳家も江戸兒だ、そんなことで總選者と奉りもしまい、且つ柳多留百參拾篇に五世川柳佃りが彼の姿繪を香蝶樓豐國に描かせて居るが、二十四篇の初世川柳よりもよつぽど上品な顏に見える、畫そらごとで、美化したのでもあらうが、それほど下劣な人物でも無さゝうだ、狂句元祖四世川柳なぞと社中の者に云はせ、自稱もしたらしいが、吾人から見て苦々しいだけで、今

日でもさうした人間は澤山居る、それを一々人格下劣を以て目するは穩やかで無い、たゞ文藝の方面で之を褒貶すれば可いのである。

柳亭種彦川柳を作る

この時、江戸の小說家として誰も知つて居る柳亭種彦が川柳界に姿を現はし、木卯の名を以てしきりに作句をして居る、柳樽七十七篇序は彼の筆だつた、此篇に於ける賤丸評は

公用の外は見られぬ紅葉山　文虫

といふ、江戸城の壯嚴を頌したもので、大尾は有名な

鶺鴒は一度教へてあきれはて　團石

だつた、狂句元祖の下準備はすでに出來た。

それが文政六年の秋で、翌七年九月十一日、十二日の兩日を以て、終に眠亭賤丸改め四代目川柳と爲り、其襲名の大會を興行した、催

四世川柳の襲名大會

主は菅主、補助は風松、板人、杜蝶で「相評東西三百餘株ッ、古今の大會なり」と書してある、種彦は、柳多留八十二篇に於て其序を作り、其日の光景を略記して居る。

種彦の柳樽序文

こゝに酒あり柳樽に湛へたり、彼鬼貫が伊丹のかる口に勝るは、新川ならぬ淺草新堀川柳が釀して世の人に涎を流させしよりこのかた、其杜氏川柳の名を繼ぐ者三世にして酒造のことを廢す、今眠亭賤丸よく其術に長たり、ゆゑに樽次、底深におとらぬすき人等、賤丸をすゝめて四代の杜氏川柳とあふぎ、河内屋が奥藏に名びらきの筵をまうく、集る句は一萬に餘り、數百人の連衆高樓に居流れたり、干時文政甲申秋九月十二日の曉天、いまだ星の消えざるに開口文臺に向ひ、樂評加評の數卷を披露し、日沒を燭に次ぎ、とかくして川柳が選る卷を吟しを

はる頃は、十三日の朝烏東天に輝けり、嗚呼此道の廣き事武藏野にや比すべき、びつくり丸にや譬ふべき、若し小原のせばき心もて蜂龍のさし合をいふ者あらば、罰盃三杯を盛らんと新連の荒走り木卯と替名せしえせ作者種彦順の舞にうかれ出、醉中に漫書す。

何ぞ其御祭騒ぎの盛ンなるや、恰かも明治大正に於て、此の如きことをしば〳〵繰り返した私は他事とは思はれない、轉た藝術を汚したといふやうな悔恨を感ずる、この時の勝句は、八十二、八十三兩篇に於て發表せられた、賤丸が一生の曠れ、四世川柳として始めての評選を見ると。

鳳も出よ御代の寶に桐の紋　山笑

夷賊の曲りため直す日本武　佃リ

取りも取つた作りも作つた

二度までは汗をもはぢく緋の衣　木卯

三教を以て治る君子國　狸聲

もう一度飲むと知章も駕に乘り　海月

四海納り白浪の沙汰も無し　水鏡

水玉で火宅をすくふ御仁惠　木卯

下ケ髪と白髪にこりた芥子坊主　佃リ

黑染の御門我たつ柚へ建て　礫川

ひとみを定め選んだは一萬句　菅子

親ゆひと小ゆび一名レコとレコ　賤賀

鬼蔦の軒にからまる焔魔堂　柳雨

居候或夜の夢に五はい喰ひ　礫川

睾丸が二疊敷ある狸の子　くしゐ

佃リは後に五世川柳となつた男、木卯はいふまでも無く種彦だ、「四海納り」だの「下ケ髪と白髪」は神后に武内として、その敵を「芥子坊主」と支那と朝鮮を同しに見た句を作つた男も作つた男、取つた男も取つた男だ、それが狂句で一世を轟らせ、一九種彦をも烟に卷いた四世川柳と五世川柳だから驚くでは無いか、然るに例の老人格者文日堂礫川は、三十三篇に、その翌年正月の日附で、之を推賞した文をのせて居る。

柄井川柳叟、世を辭してよりこのかた、二代目、三代目、その名を繼げりといへども、句々を判するにいたりては、一流の滑稽幽妙を失ふに似たり、たとへば盲人の象を探りて、足を撫ては桶なりと言ひ尾を曳ては箒ならんと言ひて、いかで其眞を見ることあたはず、今さらに、四代目川柳なむ出て、全象始て見え、たゞちに眞面目を得たり、豈よろこばしからずや、はた古柳翁嘗ていへる事あり、もし百年の後、ふたゝび我が奥旨を知る人出んと、まさに此川柳雅士のために言へるなるべし、嗚呼川柳なる哉。于時文政八年酉の孟春、七十八歳文日堂礫川題ス。

春風にうちまかせたる柳哉　礫川

文日堂が群盲評象の故事

私は、もうこれについて云々する勇氣を持たない、たゞ呆ッと感ずるばかりである、「しげり柳」には、この文日堂を贊して。

茲に原俳諧者流にして文日堂礫川氏あり、子は狂句の道を裨補なす、恰かも湯武の伊因に於けるが如く、頗る名譽あり、在世俳諧觴（ツノヤリ）百篇の輯錄あり。

川柳界の伊尹大甲

と云つて居る、伊因は伊尹で、殷の名宰相だ、文日堂が三世川柳の判者たるを拒絶して、これをたゝき込んだのを、伊尹が太甲を桐宮に

放つといふに譬へたのだらう、が俳諧觸（ツノギリ）を春日堂の輯錄とするのは、違つては居ないか、俳諧觸は明和五年、露竹舍靈成といふ俳人の編輯したので、文日堂と同人とは思はれない。

鬼の手へ行くと間も無く玉の輿　一漁點
弔ひの供も見て行く初松魚　晋阿點
五六尺紅買ふて行く猿廻し　津富點
氣違ひの力をほめて戻りけり　眠牛點
女房の崩しはじめは結び髪　紀逸點
かくす事多き女と生れ來て　平砂點
病上り物いたゞくが癖になり　春堂點
内にかと百ほどいへば厠より　爲裘點
燭臺のそばであぶない舞の袖　逸志點

俳諧つのぎり

放し鳥手前勝手を云ひ含め　長隱點
生醉のとき抱きついたばかり也　寸松點
はたし狀硯の水を入れ過ごし　可因點

これ等はさすがに明和時代の句で、俳諧觸に白粉は我を苦にする始めなり

とあるのが柳多留では

耻かしさ知つて女の苦の始め

となり、俳諧觸に

裸ではいる清盛の醫者

とあるのが柳多留では

清盛の醫者は裸で脈をとり

となり、俳諧觸に

かたちは炬燵首は人間

とあるのが、柳多留では

人間の顔でからだは炬燵なり

となつてゐる、其他この類は多い、これ等が、川柳が類句拔選についての事をことわつてゐるところだ、(前に云つた)以上は明和頃だが、文政頃に

虛無僧は淋しい秋の立姿　壺外點

世に飽いて剃れば夜は蚊晝は蠅　千頂點

兩方で涼し船の灯二階の灯　素塵點

などがある、これ等は或は文日堂の輯錄したものかも知れない、

四世川柳成田山奉額大會

話が岐路に入つた、四世川柳は天保三年、深川の成田山開帳奉額大會をやつた、樂評五十名、集句三萬三千といふ盛會で、柳多留百二十二篇にそれが載つてゐる。

天恩に凡そたとふる物は無し　八十五歳文日堂　礫川

風月の才梶原の疵に玉　佃リ

ひどい生酔喰つた蚊も酔て居る　ごまめ

これが卷頭、卷軸だ、佃リは五世川柳、ごまめは佃リの子で、後に六世川柳と爲る男だ。

五世川柳の新篇柳樽

然る處四世川柳は、役目の上、川柳宗匠などして居ては憚かるとが出來、點式を綠亭佃リに讓り、五世川柳にした、五世川柳、姓は水谷名は某、ます〳〵狂句の風を興し、江戸の川柳をいよ〳〵墮落の淵に沈めた、天保十年に初世川柳の五十回忌の追善大會を催し、また安政七年には七十回忌を催した、前者は選者五十名で集句二萬八千、後者は選者六十三名で百番以上の景物を出す者二十八名、集句

四萬に及んだとある、開卷の莚三晝夜、其名望祖翁に劣らずと、社中から太鼓をたゝかれた、その圖にのつたかどうか知らないが天保十二年には、誹風柳多留以外に『新編柳多留』なるものを著はし、その初篇を刊行した弘化三年に三十八篇が出て居る、其後は何篇まで出たか、私は知らない。

輕き身も重く頂く御國恩　旭

入相を下戸が聞き出す花の山　七種

禍が外からは來ぬ栗のいが　茶人

晝はうと〳〵少將の戀の闇　三扇

かん德利時分はよしと尻をなで　七種

軸

神さびて光りの增る祭り武具　五世川柳

明和川柳と天保川柳の比較

これは珍らしく月並俳句で無い、末番狂句だ、其子ごまめも亦た選者と爲つて居る。

機を斷つ胸には慈悲をたゝみ込み　雷獸

兩雄立たず應仁の山と川　叶

其中に

出さぬのは惜しむにあらず嫁の智惠　山櫻

といふのを拔いて居るが、明和期の

大才をいだいて嫁は施こさず

と比べて、その甲乙、專門川柳作家ならずとも分らうでは無いか、これならば四萬でも五萬でも集句はあらう、大將や若大將がこれだ、その他の選者が六十人居やうと、百人居やうと、思ひ知る可しで代りばんこ〳〵に得々として文臺に着き、自分の選を披露する、ちよ

川柳を毒するお祭的大會

つと技巧のうまい奴は、景物を山ほど積む、初心の作家は、オレモあのやうな選者になりたい、あのやうに景物が積みたいと羨やましがる、詩だの、魂だのとテンで問題で無い、こんな川柳家が千萬人出來たとて、芥箱に蠅が湧くやうなものだ、今も昔も川柳道を毒する者、これより恐ろしいことは無い、安政五年八月、七十一で死んだ、長男ごまめ、六世川柳と爲つた、さうして王政維新を經て、明治に及び、專ら狂句を勵んだ、が、江戸時代はこれで終つた、江戸時代の川柳史は、こゝで擱筆することにする。

第十九章　川柳と江戸の社會

俳句も宗鑑、貞德は京都に於て、宗因は大阪に於て、其詩の興隆を行なつた、が、芭蕉に至つて、江戸に移り、此地で正風の開眼をした、江戸座、雪門、葛飾派などが、全國の俳徒に向つて、恰かも總本寺のやうな態度で號令を四方に下すかに見えた、が、それも其角、嵐雪、素堂と云ふ者が居たから、さうだつたので、それに拮抗すべき去來、許六、支考、などが地方で、それ〴〵一派を打ち立つるに至ては、容易に江戸の號令に從はない、後年の俳傑蕪村、曉臺、一茶、大江丸は、悉く江戸以外の地方人である、しかるに川柳はさうで無い、第一、元祿前後の京

京阪の川柳は質に於て江戸に及ばない

阪の前句附は、其物こそ川柳の形體を有して居るが、質に於て江戸に及ばない、しかも其實暦明和の全盛期が、江戸に於ての運動で有つて、京阪及び地方は、はるかに後塵を仰いだものだ、私は如上の川柳歴史を叙するに當り、主として京阪と江戸とを叙し、他の地方に及ばなかつた、また全盛以後の京阪についても云はなかつた、其他の地方で或は出羽、或は遠參、其外前句附の興行が盛ンで有つた地方は有つたが、これに言及はしなかつた、一には材料の不足も然らしめたが、要するに地方では其土地々々の俳人の餘技としてそれが行はれたので、江戸の如く、專心これに周旋する者が居り、また俳人の如きも、たゞ俳諧の歌仙を卷き、古人の餘唾を甜めるに苦心するよりも、前句附の點者と爲つて、衆に望む方が、その趣味を滿足する上にも、先輩として衆人より立てられる上にも、一擧兩得だつたので、終に此の如き流行を來したのであり、尙ほ言ふことは好まないが、賭博類似に僥倖の射利を欲する人間性が之を助けたことも爭はれない事實である、抑も寶暦明和は如何なる時代で有つたか、

地方川柳は俳人の餘技

地方に於ても風水の害あり、兇年あり、諸侯領も幕府も、農民は誅求に苦しみ、商賈も不況を泣くの慘狀を呈し、往々百姓一揆や、富豪打壞しが行はれたに拘はらず、江戸は田沼時代の腐敗其絶頂に達し、賄賂請托、饗應、遊樂に、地方より搾取せる民衆の膏血とも云ふ可き金銀を湯水の如くばら撒き、以て位地を買ひ榮利にありつき、ひたすら噴火山上の舞踏に我を忘れて居た、御蔭を蒙むる江戸の民衆は、その湯水の如くばら撒かれた金銀を懷ろにする利得があり、自家相應の歡樂を追ひ、濁る田沼を罵しりながらも、清める白河よりは難有いと悅んだといふ所謂江戸ッ兒の耽美氣分、始めて町藝者

地方人の膏血を啜つた江戸ッ兒

腐敗したからこそ美酒が醸された

といふ者が出來たといふ光榮なる歴史を殘し、繁昌するは遊里と劇場、神佛の開帳、終日ぶら〳〵遊んで居て、講釋ばいり、軍記の耽讀、床屋と湯屋で今日の新聞種の交換、それが江戸ッ兒の日課で有つた、川柳の全盛期が恰かもこの時勢に際したので、それを詠じたものに不朽の名句も殘つたのだ、豚から眞珠、黴から美酒、腐敗したからこそさうなつたのだ、と云へば云へる。

惡所とはばちのあたつたことばなり

今暮れる日に傾城はかゝはらず

待つ顔へ櫻をり〳〵散りかゝり

八朔は金鷄鳥も驚に成り

來たかともいはず來たともいひもせず

大門を鷹もじろりと見て通り

盃と小判けつして いたゞかず

智惠まん〳〵たる嘘ッつきお職也

客帳はけだし女郎の秘事にして

立て膝でふみを書くのも姿なり

傾城も慾氣を去ればわが心

遊里を「惡所」とは明暦頃からの通り言葉だつたが、川柳は皮肉つて斯う詠んだのだらうとは誰も考へるが、豈料らんや、他に惡所といふ文字をつかはぬところを見ると、當時の川柳作者は、本氣で斯う云つたのかとも思はれる、道中をして茶屋まで往き、ちやんと床几に腰をおろし、大盡客の來るのを待つて居る「顔に櫻のちる」風情、日まさに落ちんとする時、悠然として居る態度、盃をいたゞく藝子、小判をいたゞく幇間の眞似はしないといふ意氣、立膝で艶書をもの